俳　句　雑　誌

水　明

２０２３　12月号

令和五年十二月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十六巻第十二号

《今月のかな女》

さめかゝる肌に柚湯の匂ひけり

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

年の瀬も押し迫り冬至を迎えた夜、湯船に拵ぎ立ての柚子を入れ、柚湯に身を委ねたかな女であった。ゆっくりと湯に浸りながら、その年の様々な出来事を思い返している。歓びもあれば反省することもあったであろう。何れにしても至福の時間には違いなかろう。湯から上がってほてる身を慈しんでいると、仄かに柚子の香が這い上がってきた。

（鬼之介・註）

水明

第1119号

――華の一句――

小枝もて白壁擦りゆく秋意

渡辺舎人

白壁と云うと土蔵を連想するが、掲句の場合は、白壁の塀を対象物に設定した方が句意が通じると思う。城下町や歴史のある地方都市には白漆喰で上塗りした白壁の塀が現存している。さて、この句の情景は、とある人物が道端に落ちていた木の小枝を拾って通り道にある白壁の塀に小枝を擦りつけながら歩いてゆく姿である。筆者はこの人物をごく若い女性であると見た。その行為と「秋意」は、その女性のその時のネガティブな心の内を表している。

（鬼之介・推薦）

水明

令和５年
１２　月号

今月のかな女　山本鬼之介　4
華の一句　椎野美代子　6
浜町の灯（作品）　森本早苗　7
曼珠沙華（近詠）　町野広子　8
明石海峡大橋（近詠）　檜鼻ことは　10
風琴　雪欄作家近詠鑑賞
ゆずり葉　季音月評
季音「雪」（同人作品）　矢作水尾　山中みどり　柚木治子　ほか　12
季音「月」（同人作品）　松宮保人　梅澤佐江　井上燈女　ほか　19
季音「花」（同人作品）　檜鼻ことは　河野はるみ　曲淵徹雄　ほか　24
『水明誌』を繙く　中内亮玄　29
現代俳句鑑賞　網野月を　30
俳誌望見　染谷風子　32
十一月号の巻頭句　33

水明の記事他誌転載　34

水明集　反町修　梅澤輝翠　岡田宣子　ほか　35

水明集作品評　山本鬼之介　46
水琴窟（夏季競詠鑑賞）　池田雅夫　50
鼓笛集　52
山紫集　56
水明塾を終えて　青木鶴城　62
水明塾全句講評講座　網野月を　64
水明例会報・各地句会報　68・71
水明通信　55
新珠賞作品募集　77
新春俳句大会・水明忌のお知らせ　78
「例会・句会指導者および幹事会」のお知らせ　79
日めくりカレンダー　80
風声・発展基金御礼　81
後記　82

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

浜町の灯

山本鬼之介

離れ家の琴を聴きつつ松手入れ

張りぼての釣鐘鳴らす村芝居

秋江や花嫁舟の復活す

念力で探す松茸きのこ山

霧の浜町江戸と覚しき常夜灯

警察犬が嗅ぎ分けてゆく草もみぢ

行く秋を扇みやびに地唄舞

初冬や鳩飼ふ家の朝の音

曼珠沙華

椎野　美代子

曼珠沙華昼を灯せり宝石店

赤の贅以下省略の曼珠沙華

赤い川否畦道の曼珠沙華

まんじゅしゃげ蝶蝶とばかり触角を

曼珠沙華どこかの罠がはじけてる

鶏冠にさしくる力み曼珠沙華

曼珠沙華マスクの内の唇化粧ふ

今はもう飛びこせぬ溝曼珠沙華　明世

「もう」に言語化し難い人生の機微を詠みとる時、その万感の心情に何時も私の胸は震える。現代俳句協会賞受賞、弟子達の憧れるカリスマ性、ファッションセンス抜群。「ボクは明世さんの句が好きだ」と兜太に云はしめた明世師。昭和五十四年、一つは与野市に水明句会をと立ち上げられた「野菊の会」

現在会員四名、他。憧れ続けた師の灯を慈しみつつ点し続けたい思の昨今である。

明石海峡大橋

森本早苗

秋高し小さく渦巻く明石の門

吊り橋はハープの化身鷹渡る

連絡船秋夕焼へ舵を取る

秋夕日声上げ落ちる播磨灘

橋灯る夜長の窓辺浮かれをり

秋うらら舞子の浜に糸垂らす

秋澄むや国生みの島父祖眠る

明石海峡大橋は、一九九八年四月に開通した神戸の舞子から淡路島へ架かる全長三九一一メートルの世界最大級の吊り橋である。日没から二十三時迄の橋のイルミネーションは、いつ見ても心がときめく。

又、平成二十五年には、発行所から主宰をはじめ十二名の参加を頂き、総勢二十九名で関西夏行を行った場所でもある。「橋の科学館」や「舞子プロムナード」等、当日を懐しく思い出しながらの旅であった。

風琴

◎季音雪欄作家近詠鑑賞　町野広子

◇鎌倉散歩（九月号）　石井喜恵

炎帝に龍が眼を剥く天井画
甲羅干す亀のまばたき半夏生
夏落葉七百年の養生木

お祝い事に集まった作者。翌日は鎌倉散策に出かける。鎌倉五山（建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺）は室町幕府が寺の力をコントロールする為に定めた物。その円覚寺仏殿天井の「白龍図」は、とぐろを巻いた白龍が迫力満点で訪れた人を魅了する。境内にある池にはストレス無く甲羅干しの亀がいて、それが瞬きをした事に大感激の作者。歴史ある町の多くの寺々の木々。それらには支柱が施され保護されている。初夏の落葉に風情を感じる。

若竹の伸びて陽の透く空広し
吾が影を我が踏み行く梅雨晴間

竹林の美しい報国寺。青々とした今年竹がまっすぐに伸び葉の間から差し込む陽差しと青空。景色が見えて来て、清々しい空気の中をゆっくり歩む作者が若々しい。

前を行く子の影を自分が踏む。何げない日常の事を「吾」と「我」とに巧みに使い分け、梅雨晴れの暫時をご家族と散策する機会に恵まれた作者の、心の俳句である。他愛ない会話や、ふとした気付きにも幸せは満ちている。

◇夏館（九月号）　五明昇

夏館波止に真白きスクーナー
午後の紅茶窓辺に啜る夏館

ご夫婦で海外旅行を楽しまれる作者。ヨーロッパの夏館は白い洋館をイメージする。一句目海の傍に建つ館と、マスト二本を立てた真白な帆船と何処迄も青い海。広い空。まるで一枚の絵を見ている様である。清潔で洒落た館のカフェに休む。紅茶を啜りほっと一息「啜る」なので、ま夏とはいえ、温かい紅茶なのであろう。二人で向き合う安心と喜びが、ほのぼの伝わる。

ポッダムに往時を語る夏館
夏館ゴンドラに聴くカンツォーネ
フォンデュの香レマン湖畔の夏館

昭和二十年七月二十六日、日本に対し無条件降伏が宣言され、同年八月十四日にこれを受諾し、敗戦を迎えた。ドイツベルリンのポツダムにある宮殿は今も残っていて、日本人としては感慨深い思いで眺めた事と思う。イタリアではゴンドラの上で、声量あるカンツォーネを堪能。生で聞くそれは、心を揺さ振り何よりの旅の想い出となる。スイスでは、雄大なアルプスとレマン湖。そしてフォンデュとワイン。寄り添うお二人でいてこそ、全てが美味しく楽しい旅であろう。

◇鐘楼（十月号）　矢作水尾

袖口を一つ折して盆掃除
踏石の火照り烈しき炎天下
髪撫でるやうに日傘をたたむ墓地

これ迄に体験した事のないこの夏の猛暑に、気力と体力を奪われた。しかし季節は巡って来る。お盆も近くなり、仏壇や家内外の掃除に励む。上五中七に働く姿が見えて来る。炎天下は石をも焼き、履物を通してさえ熱気が伝わる。自宅の整えを終え墓地へと向かう。日傘をたたむが「髪撫でるやうに」との表現が、何とも奥床しく、ご高齢の母と、それを見守り、常に労う子供達との穏やかな関係性が感じられる。日傘をたたむ何気ない仕種から生まれた一句である。

夕焼の町を包める寺の鐘
菩提寺の甍を染めて夕焼す

作者宅の菩提寺の梵鐘は、長年の風雪に堪えて緑青が吹きそこには歴史と共に得も言われぬ趣がある。寺も梵鐘も町の大切な財産なのである。寺の甍は勿論のこと、町全体を染める夕焼。この美しい一時を作者は大いに楽しみ、手入れの行き届いた境内の木々や草花を心から慈しむと共に、今日への感謝と喜び、来し方への思いへと遠く深く繋がって行くのかも知れない。

常に流される事なく、淡々とご自身を保ち齢を重ねて来られた作者に、強さと神々しささえ覚える。

◇素のままに（十月号）　小倉倭子

待宵の鉄橋渡る音はるか
月光に晒すこの身や露天風呂

明日は十五夜。今日の月も充分に美しいが、名月を待つ心の中に聞こえる音。鉄橋を渡るのは電車と思われるが、もしかして風の音か、又は、明日の月を待つ心の音かも知れない。

二句目誰も居ない露天風呂に身を沈める。心休まる一時。「月光に晒す」が清謐な一夜を表し、作者の清潔感をも感じさせる。月へのロマンがそうさせるのか。

おぼろげな視覚聴覚雨月かな
十六夜のノンアルワインで酔ひ心地
かの人と秘する約束居待月

いつしか老いてゆく日々。目や耳も少しづつ悪くなって来る嫌な事は聞かない、少し位の汚れも気にしないと開き直り、ご本人に不自由はあろうが、長年酷使して来た目や耳に感謝しつつ、自分を解放すればいいのではないかと筆者は思う。おぼろが雨月にもかかっていて、作者の憂鬱が伝わる。

近頃ノンアルコールの飲物が増え、色々な都合で飲めない人の救いとなっている。そのワインを嗜みながら、十六夜の月を愛でる。ノンアルコールにも係らず、酔い心地になる。月への憧憬を抱く作者の心がそうさせるのであろう。

三句目の「かの人」は女性とか。大好きなその方と先の約束を交わし作者の心を明るくする。その日迄を楽しみに待つ心が、居待月に重なる。楽しみを見つける日々の作者である。

ゆずり葉

◆季音十月

檜　鼻　ことは

金閣の姿涼しき水鏡　　矢作水尾

金閣寺の名で知られる鹿苑寺の舎利殿は金閣の名に相応しく、慈愛に満ちた黄金色に包まれ、目の前に広がる鏡湖池は金閣の姿を水面に美しく映し出している。

鹿苑寺は、春は桜、夏は緑、秋は紅葉、冬は雪と、四季折々の風情を楽しめ、いつ訪れても美しい姿。金閣は三層の造りになっていて一層は法水院と呼ばれている。法水とは、煩悩を洗い流す水を指すのだそうで、北山文化を垣間見ることができる寝殿造になっている。

酷暑の日が続いた今年の夏であったが、京都の夏はそれでなくても暑い。水鏡に写る金閣は、格別の涼しさを感じさせるほどに美しい姿であったのであろう。

端正に処暑の風受け高野槙　　柚木治子

私の住まいしている若狭地方は真言宗の寺院が多く、境内には必ずと言っていいほど高野槙が植えられている。

高野山にその群生地があり、弘法大師が生花の代りに高野槙の枝葉を供花としたことから、仏前や墓前、神前にも使われるようになったのだそうだ。庭木にされているお宅も多く、華やかさはないが素朴な姿はとても品があって美しい。

処暑の風の中、優し気で生命力さえ感じる高野槙には端正という言葉がまことに相応しい。

口尖りいなせな貌の秋刀魚買ふ　　熊倉千重子

秋の味覚の代名詞である秋刀魚。シーズン前は不漁の予想であったが、予想に反し今年の秋刀魚漁は好調。魚河岸の入荷量は昨年の三倍近くになり、サイズもひとまわり大きくなっているうえ、店頭価格も昨年より三割ほど下がっているのだそうだ。

店頭にずらりと居並ぶ初秋刀魚、買い物にも腕が鳴るというもの。「いきな深川、いなせな神田、人の悪いは麹町」とは遊船唄の佃節にある一節だが、さぞや立派な秋刀魚を手に

入れられたに違いない。
秋刀魚ならまずは塩焼き、苦いはらわたもこれまた美味く、食卓でいただくほうとしてはお銚子の一～二本もつけたいところだ。

手渡しで受ける郵便むくげ垣　荒井倶子

朝咲いて夕方には萎んでしまうのだけれど、次から次へと花をつけるので、秋口の木槿の垣はひっそりとして美しく上品な風情である。
コロナ禍で右往左往したここ数年、人と触れ合う機会が気づかぬうちにめっきり少なくなってしまったような気がしてならない。ある意味、気楽と言えば気楽、寂しいと言えば寂しい時代になってしまった。
手渡しで受ける郵便、そこには二言三言の何気ない会話が生まれる。掲句から感じるやさしい温もりにほっとする。人の言葉は、いつでもあたたかい。

秋めくや余白の多き水彩画　野田静香

水彩画の温もりのある淡い色合い、光を含んだ空気感のある伸びやかな色の広がりが好きだ。
フラワーアレンジメントは空間を埋めるのに対し、生け花は空間を作り、花を表現すると聞いたことがあるし、写真にしても構図のとりかたで随分と印象が変わる。
水彩画に限ったことではないのだろうが、余白をつくることで独特の空気感が生まれ、そこにストーリーが生まれたり、いろいろと想像を楽しんだりすることができるような気がする。そう言えば、日本の襖絵や屏風絵なども余白があってこその表現の広がりを見せている。
水彩画の鑑賞を楽しまれているのか、それとも制作を楽しまれているのか、何れにしても初秋の素敵なひと時である。

夜の秋沖に不夜城現はるる　松島寛久

春から秋にかけて若狭の海は穏やかで美しい。若狭湾は入江や岬が複雑に入り組んだ海岸線が連なっているので、誠に風光明媚。景観地は多数あるのだけれど、若狭の海を臨む絶景のポイントをひとつあげよと言われたら、迷わずに田烏海岸と答えるだろう。
海の青色はやがて空の青色に溶け込むようにひろがり、時折の白波がやさしく美しい。夜ともなれば、寝静まるように海は黒くなり、静かな波音と夜風が心地よく、沖にはイカ釣りの漁火が暗闇と海面を照らす。
一抹の寂しさを感じる夏の終わり、漁火がつくる幻想的な光景は、いつまでもいつまでも眺めていたくなる。

季音雪

葛の花

矢作水尾

連嶺の雲は動かず葛の花
洋上を鰯の銀がなだれ来る
天空の深きを映し秋の川
一人でも生きる虚勢や曼珠沙華
断崖の真鶴岬野菊濃し

秋思

山中みどり

黄落や震災慰霊堂静もれり
瞑目し合掌秋思の石畳
健やかに老い新栗のモンブラン
口紅の色変へてみる秋日和
吾にある刻は幾か程秋夕焼

深庇　柚木治子

葡萄食む滋味の湖なす口中よ
礼拝堂の静けさかもす葡萄園
いちだんと活気づく村吊し柿
我が名字多し軒端の柿すだれ
秋惜しむ義母の遺愛の姫鏡台

上野公園界隈　網野月を

あれもこれもはあれかこれかか吾亦紅
秋の日の当らぬところ偉人像
四本聳つナイター塔や天高し
切株や常の茸と毒茸
梅もみぢ五條の社護りけり

霊山　由良ゆら女

朝霧にとけて天下の倶会一処
あかときの金剛界を鳥渡る
露けしや杉の根に積む小石三つ
あれこれと迷ふてみても猫じやらし
墨蹟は深く心に雁わたし

縦走　石井喜恵

天高し尾根縦走の八ヶ岳
呼ぶ声の背に届かぬ芒原
いくつもの影を脱ぎつつ秋茜
刈田中落日に佇つカメラマン
山路暮れ小雨に烟る葛の花

いぼむしり　石山かつ子

生れたてのあくび洋洋秋うらら
洋梨のくびれ具合をたしかむる
いぼむしり虚勢を張つて身をゆすり
狼の背に乗り来る竜田姫
炉話や佳境に入れば虚言も

満月　大橋廸代

火恋し果無山を真つ向に
男七人やつさもつさの松手入
電飾でがんじがらめの槻紅葉
あけ放ち月と添ひ寝をたのしめり
夜もすがら女独りで釣る太刀魚

菊人形　大村節代

面通しする私服の刑事吊し柿
シンバルの大き一打に去る小鳥
初紅葉だらりの帯の路地に消ゆ
菊人形差替へてまた若返り
男来て菊人形の脈を診(み)る

尾花　栢尾さく子

耳癈ひて夜通し鳴かす草雲雀
毛ば立ちて届く十六夜の封書かな
断崖を尾花競ひて飛ぶ日なり
終焉を思はす夕花芙蓉
もくせいの匂へば仰ぐ杖立てて

千枚田　菊池ひろこ

風を読む案山子もあらむ千枚田
ひらがなの眼で娘らを追ふ案山子
霧笛鳴るあとの空耳「赤い靴」
自称グルメとや高層の霧に住み
土手のあきつ詩になりたくてホバリング

秋景　五明昇

爽涼やキリマンジャロを熱く濃く
牛の背に濤音を聴く赤蜻蛉
葛の花我が身に揺らぐかずら橋
百万石の刈田を分くる新幹線
秋耕に時報の届く蔵の町

お咎めなしに　境延昭

秋鯖の旬のきはみをバッテラに
手掴みをお咎めなしに衣被
長き夜を妻はパズルに首つぴき
大刈田風を頼りに熱気球
穴まどひ墓所は疾うに手配済み

刈田　椎野美代子

どんと晴刈田の匂ふ刈田道
連れ立ちて老人講座刈田道
大刈田ここより風の生まれたる
肉質の雲が雲追ふ刈田原
刈田原はるか縄文弥生人

秋思

島津初花

秋深し断捨離の身のほぐれゆく
茶柱に暫し無言の秋思かな
不漁といふ秋刀魚寂しき瞳をしたり
萩こぼる友と語りし日の一句
秋風にポニーテールは身の一部

秋ひと日

鈴木康世

万年筆の文字やはらかに涼新た
逢ひたき日西方に吹くひよんの笛
心澄み風澄み夜の秋気澄む
夫を待つ面影橋の秋の暮
「吝か」が読めず辞書ひく秋の夜

淡路の灯

田寺玲子

月今宵水面にあはき淡路の灯
火を恋ふや潮騒高き部屋に在り
羨道のほのかな明かり秋の声
秋薔薇の出窓にゆるる異人館
天高しドームに響くカンツォーネ

鰯雲

十倉和子

渡海僧発たせたる浜鰯雲
千畳敷の忘れ潮にも鰯雲
小座布団と待つ無人駅火恋し
跳箱と跳べぬ子の影秋夕焼
起き出して歳時記を繰る十三夜

綿　虫　　鳥羽和風

綿虫や知水嵯迷の碑の温し
綿虫や昔の酒に浜小町
薬草の乾く音して雪螢
綿虫の虚空さまよふ哀れかな
綿虫や飯場に大きマッチ箱

風　格　　永野史代

小町通りに肩の高さの赤蜻蛉
赤蜻蛉鎌倉山を住み処とす
ふつくらと煮上がる母の新大豆
臥す母の口へと運ぶ新豆腐
風格は家紋に恥ぢぬ桔梗咲く

晩　秋　　波多野寿子

かろやかに琴の伴奏秋うらら
友恋ふる秋明菊のさゆらぎに
樹々の色池にうつして秋澄める
晩秋の安曇野を行くさびさびと
爽やかな娘の声がする音がする

砂　時　計　　星野和葉

躓きたる片減りの靴蚯蚓鳴く
蚯蚓鳴く大吉みくじ握りしめ
指一本でピアノ一音秋わびし
砂時計秋思の砂を落としけり
思ふまま独り秋思の墓地を行く

揺るる　茂木和子

霧流る見えて隠くるる天主堂
霧深し間遠に鳥の啼き交はす
霧襖観音開きに晴れ行けり
蓑虫と語りたきこと長居せり
蓑虫ゆるる顔も手足も影もなし

星月夜　森本早苗

鈴虫と深き夜の闇共にせり
月祭る特設舞台の笛太鼓
最終便の尾灯見送る星月夜
蟷螂ののそのそ逃ぐる吹き溜り
我が住み処猪出没の掲示板

座談会
最近の名句集を採る
黒田杏子『八月』　赤野四羽
橋本榮治『瑜伽』　大西　朋
山口昭男『礫』　名取里美
司会＝筑紫磐井

俳句四季大賞受賞記念作品40句
星野高士

◆巻頭三句
宇多喜代子
高橋睦郎
正木ゆう子

中村和弘
岩岡中正
能村研三

◆今月の華
大石雄鬼
渡部有紀子

◆俳句と短歌の10作競詠
井越芳子
水原紫苑

◆好評連載
成瀬政博　とりあえずの日々
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西　朋　俳句へのまなざし
神作研一　てのひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
堀田季何　諸家書架
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季
Haiku Shiki
2024年1月号
12月20日発売
定価1100円（税込）
https://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013　東村山市栄町2-22-28　☎042-399-2180

講演録
小澤　實「去りゆきしひとびとの声」

新連載
俳句の詩語イメージ辞典◎井上泰至

季音月

柚子味噌　松宮保人

リフトより一歩踏み出す秋の風
ふはつと来て鷺の番ひや刈田原
柚子味噌や旨し朝餉の一時ぞ
「水」の字の蔵のしころや吊し柿
タイムカプセル開くれば校下秋深む

実葛の宵　梅澤佐江

ピエタの如く膝に抱けり捨案山子
秋の灯やゆかしき奈良の阿修羅像
底砂に日の揺らめきや秋の川
吐息さへ山昂らせ龍田姫
実葛牛車の停まりさうな宵

星流る　井上燈女

良き事は近くにありて星流る
ひと畝の鍬の重たき白露かな
後手に結ぶお太鼓菊日和
凶作や農夫思案の腕を組む
草もみぢ畦に一丁忘れ鎌

秋意　渡辺舎人

あれと云ふものにあれこれ八頭
小枝もて白壁擦りゆく秋意
踏鞴踏み走るを拒む児運動会
運動会影に抜かれて泣き出しぬ
きららネームずらりと並ぶ学園祭

際にゐる　正木萬蝶

産土の神を引き連れ秋起し
膝を折り祈りの形に捨案山子
八百万の神の抜け殻捨案山子
かくれんぼ隠れそのまま捨案山子
男と女その際にゐて新豆腐

里を訪ふ　松井由紀子

古里へはじまる徐行刈田原
半生は嫁なりし母秋茄子
夜語りや木の実降る音風の音
新米を誇る五代目ピアスの子
ゆつくりと坐るゆつくり温め酒

秋惜しむ　高島寛治

刈田原残る香りと陽の匂ひ
秩父嶺に添ひて離れぬ秋の雲
頑に熟るる山梔子実の捩れ
忌を修す母の好みし菊を活く
山小屋は戸口を鎖すや秋惜しむ

今日の月　大場順子

稔り田や田んぼアートの鶴よ飛べ
陽の色に村活気づく柿簾
背伸びして祖母のほまちの吊し柿
秋耕やひねもす鳶の笛の中
幸福は活けて供へて今日の月

冬来る　池田雅夫

雨の日の溜息まじり冬来る
揚げ足を取られて喧嘩神の留守
隠しても小春日和の気のゆるみ
石仏の黙の連鎖や冬紅葉
一枚の無駄なく木の葉散りゆけり

夜寒　藤澤喜久

秋風の吹きぬけてゆく笑ひ皺
新走り杜氏祈りの醸す快
独り言飴玉ひとつ夜寒かな
鬼やんま富士山を越すカメラアイ
難聴の枕に沈む夜寒かな

風の小僧　丸山マスミ

剥落の幹の古色や居待月
秋の田を左右に縫ひて利根悠悠
刈田道風の小僧と後先に
風折れの秋の七草切通し
縄文の女神出つ尻秋桜

貧乏徳利　近藤徹平

四阿に貧乏徳利萩の花
防災日団長殿に頭中
未だ見ぬ月の裏側衣被
手に残る痒みの記憶衣被
日野富子北条政子龍田姫

夜の案山子　福田千春

立つて寝る案山子は明日も早いから
跡継ぎができて気合ひの新豆腐
恥ぢらひの色は辛口新生姜
蝗採昆虫好きは類をよび
煙草の香残るシャツ着て案山子かな

草紅葉　大塚茂子

釣瓶落しや江ノ島黒きかたまりに
流鏑馬の蹄の跡や草紅葉
誰のとも分らぬ古墳野菊咲く
大空に傘鉾のごと柿の村
稲架組みて変らぬ位置に武甲山

翡翠色　熊倉千重子

牧の馬朝霧晴れて歩を馴らす
言葉なく歩く二人よ霧の中
マスカット食べるに惜しき翡翠色
沼畔の釣果を覗く赤とんぼ
土産には地酒と笹かま秋の旅

走り蕎麦　松本光子

菊膾疎遠になりし友思ふ
男たち手際見事に走り蕎麦
秩父路の短き旅の彼岸花
馬頭観音火色に染まり曼珠沙華
利根晩秋少年石投げ波たたす

菊月　森川義子

葛の花鼓動曳きずるかずら橋
菊月や母の形見の解き衣
道祖神溺れて笑まふ草紅葉
鈍色の丸薬三粒秋の宵
遥かなる戦後を偲ぶ衣被

秋日和　荒井倶子

竹の春屋敷祠に朱の鳥居
小半の米と炊き込む山の栗
濁り酒煮つころがしを突きあふ
棟上げの木の香漂ふ秋日和
上棟の祝詞らうらう秋日和

秋高し　山田美佐尾

棟梁の棟木打つ音や秋高し
天高し米と石油の越後平野
船宿や鳥たち集ふ秋の川
諸鳥や枝にひとつを富有柿
樽柿を戸板に盛つて夜の市

あきあかね　内田恵子

赤蜻蛉杭になりたき人差指
どこへ行くちよつとそこ迄あきあかね
竜神の守る湧水黄鶺鴒
見つからぬどこでもドア穴惑ひ
平行線の交はることも蚯蚓鳴く

赤とんぼ　町野広子

赤とんぼ墓域に群れてゐて自由
赤とんぼ羽を休むる手水鉢
穏やかな心の先の赤とんぼ
争ひを好まぬ人よ赤とんぼ
赤とんぼ止まりしままの登山帽

とろろ汁　上戸千津子

丹波路に店主自慢のとろろ汁
夕茜六甲稜線秋の色
実紫池にアーチを揺らしけり
嵯峨野路に鐘の音流る去来の忌
独り居に風騒ぐ夜は火恋し

行く秋　井上玲子

行く秋や池塘に巻雲浮かばせて
行く秋や夕映えしるき那須五峰
流れゆく霧つつみゆく那須五峰
鐘わたる嵯峨野路ゆけば万の柿
肥沃なる大地黒ぐろ大根蒔く

山形弁　野口和子

母の仕草浮かびし宵よ衣被
今年米電話の向かう山形弁
秋の雲捨てるに惜しき包装紙
ひよつこりと顔出す仕草秋海棠
秋種を蒔きて小雨の予報かな

梅擬　西浦千枝子

一つ家の先客は猫梅擬
生家への一本道や柚子実る
稲刈機入らぬ棚田秋茜
山の宿抜け出て急に火恋し
電算機の桁押したがふ秋の蟬

天高し　川崎道子

天高し人文字みごとに完成す
敗走者隠れてゐさう芒原
行きつけの画廊すつぽり蔦紅葉
そぞろ寒鴨居に志士の刀傷
火恋し終着駅にひとり下り

夜寒　松山清子

鮭旨し母子三代北の旅
頂上は日本海まで秋気澄む
屋台店のごつた返して秋祭
鰯雲数値はよろし医師の言ふ
読みさしの本は枕辺夜寒かな

季音（雪・月・花）の投句について

季音の投句は巻末の投句用紙を用いて投句をして下さい。

※雪・月・花欄のご自分の該当欄を赤ペンで囲む事

※楷書で書く事

※万年筆またはボールペンで書く事

（鉛筆は不可）

季音花

倉敷川河畔　檜鼻ことは

秋の雲映る川面の渡し舟
着流しに藍の角帯菊日和
ベルギーの和服の少女思草
裏庭に眠る贋作秋の薔薇
秋の灯や橋のたもとの骨董屋

秋風の戯れ　河野はるみ

内苑の玉砂利黒し涼新た
笹舟の小石でくるり秋の川
お伽噺幾つも浮かぶ秋の川
誘はるる振りもよきかな秋の風
上州の風を味方に案山子立つ

ちぎり絵　曲淵徹雄

こぼれ萩脛たくましき大師像
道の辺に触れてやりたき水引草
十六夜やダム湖しづもる峡の村
吊し柿日日にうするる蟠り
ちぎり絵の台紙の黄ばみ夜半の秋

控へ目な秋　日高道を

朝ぼらけ埴輪の里の秋深し
桐一葉遅れて落つる影と音
控へ目になほ控へ目な萩の白
鯖鰯空に登れば秋の雲
漸寒や大聖堂の尾根の反り

穴まどひ　青木鶴城

無住寺の今朝の箒目銀杏散る
団栗を踏みて孤高の人となる
将来の夢はと聞かれ鰯食ふ
人生の生なる本意穴まどひ
連綿と一日を綴る夜長かな

山門の龍　野田静香

山門の龍を遊ばせ松手入
草紅葉の栞も入れて旅鞄
持ち札を探る眼と合ふ秋灯下
加賀蒔絵の文箱の光る美術展
煩悩の消えてゆくなり添水鳴る

合掌の家　保坂翔太

かなかなや暮れゆく山の雲燃ゆる
鉄塔の聳え立つ山秋の雲
黒煙を浴ぶる機関士かかし笑む
合掌の家を守りて稲を刈る
ささやきを聞き漏らしさう虫の声

鷸の群れ　横山君夫

岬発つ鷸の群れに秋惜しむ
飴色に透きて干柿仕上りぬ
敬老会活字大きな歌集手に
秋刀魚焼く荒ぶる音も皿に盛る
連山の澄みて稲刈日和かな

月下氷人　染谷風子

名画座に昭和の余韻秋の虹
紅萩や手を引き登る女人坂
地下足袋に男の侠気松手入れ
山粧ふバスの食み出すいろは坂
菊活けて月下氷人迎へたり

天高し　渋谷きいち

天高し召さるる母の手に折鶴
連峰をワンゲルの行く天高し
波形飛行見する河原の石叩
秋色に加ふるもの無しソロキャンプ
採れぬ松茸たつた二本で店仕舞

小さな楽しみ　石田慶子

爺さんの自慢の案山子ジオラマに
打上げは類は友呼ぶごと新酒
名月やみたらし団子を二本ほど
柳散る外湯巡りの下駄の緒に
置配のごと小菊どつさり勝手口

秋日和　石川理恵

老犬を引く老人や秋日和
鮎落つるせせらぎの中風の中
群衆の夜長ひとりの夜長かな
秋耕や予報には無き日照り雨
渇筆の加減ゆかしく秋澄めり

蚯蚓鳴く　原田秀子

小夜更けて静寂耳鳴蚯蚓鳴く
バッハ聴く通奏低音蚯蚓鳴く
野沢菜の茶請けもうれし林檎掩ぐ
凶作に生ごみ漁るアーバンベア
尾瀬ヶ原池塘をかざる草紅葉

竹の春　笹本啓子

竹の春山門飾る大草鞋
山裾の小さき茶店や竹の春
葉の上を舞台に踊る露の玉
暮の秋絡繰時計午後三時
目秤で作る煮しめや秋深し

缶蹴り　松島寛久

団塊の男の手酌台風来
無花果の里も婆も熟れゆきぬ
母校の鯖缶宇宙へ秋高し
缶けりに探偵ごつこに栗の飯
迷ふだけ迷へと地蔵秋深し

秋思　中野彊

夕暮れてこんなところに曼珠沙華
秋の風行列長し箱根そば
この杖が秋思もわれも支えをり
秋冷の湖畔に憩ふ米寿かな
名月はまとふ雲より語りかけ

鮎落ちて　瀬戸雄二郎

煮浸しにでもと錆鮎置きゆきぬ
身は錆びてなほも闘志を持ちし鮎
落鮎を食べ墓終ひの相談
下り鮎いまだ落ち行く先見えず
鮎落ちて瀬音ばかりの川となり

天高し

宮﨑　チアキ

川霧の去りて水面の輝やけり
秋晴や田圃アートの今昔
天高し藤井聡太の土つかず
正面切つて言へぬ情愛吾亦紅
秋灯下明日に持ち越す一句かな

声還りきて

田中　章嘉

残暑一変冷気引き連れ秋の座に
運動会声援の声還りきて
秋扇亡き妻の香の幽かなり
細細と垣に残るや牽牛花
鰯雲親父は腰を伸し見る

ラストシーン

下川　光子

夕映えの刈田に鷺のラストシーン
秋蛇と出食はす退る一本道
賽銭の硬貨べとつく穴まどひ
貸家札不意に現はる曼珠沙華
とろろ汁座敷童が覗きゐる

秋の茄子

後藤　綾子

立山の水きらきらと早稲育つ
落暉せる沖に流離の秋の雲
山の宿朝餉に匂ふ秋のなす
高梯子澄む空に架け松手入れ
爽涼や生きる証の爪を切る

秋日和

鈴木　玲子

グラウンドの白線太し秋の朝
二丁目の昼閑散と新蕎麦食ぶ
新豆腐参道奥に憩ひけり
父の忌や白菊抱へ墓前へと
ふくいくと「静の舞」の菊人形

藤袴

葛城　千世子

割烹の店に馴染みし藤袴
開店前手直し用の白桔梗
立ち姿店にとけこむ藤袴
隅棚や徳利にさす濃竜胆
秋ともしクラブ仲間と長電話

風見鶏　野村美子

秋風や洋館街の風見鶏
熱熱の今朝の幸せ衣被
伊勢湾や秋夕焼の首飾り
山道の撫子可憐風にゆれ
気力出し会ひに行きたし龍田姫

新松子　髙橋満耶子

急速に進む季節や今朝の秋
風はらむ巫女の袴や実南天
泣きつ面に食らふげんこつ新松子
思考力のふはりふはりと酔芙蓉
狂ひだす自律神経白木槿

特集　雲従える辰年の俳人たち
特別企画「月並派」の秀吟
新春特別作品20句　宇多喜代子
新春巻頭作品7句
今瀬剛一・宮坂静生・山尾玉藻
鈴木直充・片山由美子・対馬康子
小澤　實・坊城俊樹

俳壇
1月号
12月14日発売
定価900円（税込）
巻頭エッセイ
能村研三
八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句［第Ⅳ期］……朝妻　力・村上喜代子
新連載　知ってるようで知らない俳句用語…井上泰至
連載　俳人の住む町……深沢暁子・白岩敏秀
名句のしくみと条件……坂口昌弘
私の本棚・私の一冊……原　雅子
十二か月添削教室……前北かおる
俳書の森を歩む……栗林　浩
俳句と随想12か月　石井いさお・宮谷昌代

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

『水明誌』を繙く（水明十月号）

中内亮玄（「月鳴」主宰）

日めくりの虚ろな薄さ十二月　小山あつ子

この本を皆さんが開いた時、まさしくカレンダーは12月ですね。一年が経つのはあっという間、あまりの早さに驚いてしまいます。365枚の紙に表紙と裏の台紙も合わせ、あんなにぶ厚い、まるで板のようだった日めくりカレンダーが、もう頼りないほどに薄くなっている。あつ子さんは、残る日を数えつつ、忙しい師走を過ごしているのでしょう。

いや、違う

と、ここで私は想像するのです。もしかすると、そんなに忙しくないのではないか、と。

つまり、現役で働いていた頃や、子どもが小さくて手がかかった頃、そんな中での師走の慌ただしさを思えば、むしろ今はひっそりとした正月支度にかかっているのではないでしょうか。

それは楽だけれども、どこか心許ない気がする。その何とも言えないモヤモヤを「虚ろな」という一言で日めくりカレンダーに託しているのだと頂きました。現役世代の私にとっては少し不安で、少しうらやましくもある境涯です。

陽炎や行き交う人の静かな目　霜多光代

この鑑賞を書かせて頂いている『水明10月号』では、新同人の皆さんが紹介されていました。皆さんの喜びの場に関わらせて頂き、光栄なことと喜んでおります。

先ほどのあつ子さん、こちらの光代さんも新同人とのこと、他の新同人の皆さんも、まことにおめでとうございました。

掲句は春です、陽気にカゲロウが揺れている。人が行き交うのですから田舎の農道ではなく、人通りの多い街並みを思い浮かべます。当然、辺りはガヤガヤとうるさく、電車も自動車も走っていることでしょう。

しかし、光代さんの目は陽炎を見つけ、その瞬間に全ての音は耳から消え去ったのです。まばゆい日差し、揺らめくアスファルト、しんと静まる雑踏。すれ違う人は笑うでもなく、怒るでもなく、マネキンのように、清潔に、静かに通り過ぎて行くのでしょう。

無声映画の中に入り込んだような不思議な体験、わずか17音で言葉にできぬ雰囲気まで伝えることができる。あらためて、俳句の素晴らしさだと思います。

現代俳句鑑賞

網野月を

アリジゴク昼月ぬすむ手が見えて　高岡　修

（『俳句』10月号・蟻地獄より）

十六句連作の一句である。逆円錐形の蟻地獄の巣穴の頂点にアリジゴクの触手が見えたのである。その奇態は「昼月」を「ぬすむ手」ように蠢いている。「昼月」は薄羽蜉蝣の化身でもあろうか。それとも獲物の姿であろうか。筆者には難解である。他に「アリジゴク頭上に垂れて銀河の尾」「アリジゴクまた滝となる夢を見る」がある。

大旱鱗のごとく土剝がれ　太田土男

（『俳句』10月号・大旱より）

旱で大地が干上がっている。特に田んぼのような元々水を張っている土質の場合は、ひび割れ方に特徴があり、亀裂が入り「鱗」のような有様となって、その「鱗」が捲れ上がっている。「鱗」は形状であると同時に自ら身を守る、または水を体内に保持するという相反する特質を有していて、水に関係する事柄を「鱗」に象徴させ関係づけている。これ以上大地から水を取り上げないでくれ、と言うことなのかも知れない。他に「口笛を吹き出しさうに蟬の穴」がある。

帰郷するポプラの絮を馬に乗せ　前田　弘

（『俳句』10月号・野付牛より）

上五の「帰郷する」は「絮」に繋がるのか、それとも作者自身の行動なのか、筆者は「絮」に繋がっていると解した。では中七から座五の「絮を馬に乗せ」の主語は何であろう。大自然の業を客観的に詠んでいるのであろうか。実に不思議な句なのである。他に「右かぼちゃ左たまねぎ野付牛」がある。

行く人の行きつぱなしを眉の月　山田耕司

（『俳句』10月号・あらはにさびしより）

今年の七月七日に他界された澤好摩氏をモティーフにしている。いや好摩氏に捧げているのである。何度も声に出して読みあげて、顕わな寂しさに共感している。作者の想いの決してすべてを表出していないだろうが、筆者には受け留められない程の濃重さを秘めている。他に「割きみればあらはにさびし実鬼灯」がある。

春の星子宮小さくなりて在り　遠山陽子

（『俳句界』10月号・「生」をテーマより）

この句は「「生」をテーマに考えて詠んだ句」という特集の一句である。作者自身のエッセイが付されていて、ギリシャ神話、デルポイの神殿、自らの「子宮」についての考察が記されている。「春の星」の季語がすべてを救い出しているように読んだ。

免疫のごとく白朝顔一つ　今井聖

（『俳句界』10月号・びびとより）

千利休と豊臣秀吉の白朝顔の逸話を想起する。「免疫のごとく」という直喩表現が白朝顔の存在感に百パーセント符合する。他に「烏瓜握ればびびと感応す」がある。

何もない部屋に夕焼満たしけり　岩淵喜代子

（『俳句四季』10月号・巻頭句より）

座五の「満たしけり」の主語は、作者自身であろう。もしくは英語的に言うならば形式主語のitなのではないだろうか。窓を全開にして大気を呼び込み、夕焼までも導き入れたと読むことが出来る。度量の大きな句の構えであり、加えて構成の行き届いた組み立てになっている。

滝の裏わが眼球にいるごとし　渡辺誠一郎

（『俳句四季』10月号・巻頭句より）

上五の「滝の裏」からの視界は中七座五の「わが眼球にいる」の視界に同じである、というのである。座五の直喩表現「……ごとし」に作者の表現に対する強い意志を感じずにはいられない。ガ行の音の配列も奏功している。

何もかも見て晩秋の大きな木　武藤紀子

（『俳句四季』10月号・巻頭句より）

この「大きな木」は空間的に「何もかも」見ているというよりも時間的に「何もかも」見てきた、という意味が深いと解した。葉を落としつつ冬の眠りに就こうとする大木の頼もしさと優しさを深く感じる。他に「椎の実に聞かむ昔の話など」がある。

それぞれの丈に日當る冬の山
山の音を聴きしくちなしくちなしよ
もたらせしかまくらゆりの咲きをはる　堀込学

（句集『かまくらゆり』より）

第一句は「冬の山」をある程度近くから望んでいる景である。作者と山山の位置関係がすこぶる微妙なのである。自らの立ち位置を再確認しているような感覚に襲われる。第二句は「くちなし」が二度出てくるのだが、中七の「くちなし」は実在のそれであり、座五の「くちなし」は胸中のそれである。第三句は誰かが手折って作者に与えた「かまくらゆり」が「咲きをはる」という二人の関係性の現在の意味を演出しているのではないか、と勝手に解釈した。三句とも俳句という詩形でなければ表現し得ないものである。

俳誌望見

染谷風子

「四季」

二〇二三年九・十月号　通巻六十号
主幹　松澤雅世　発行所　東京都文京区

昭和三九年一月、松澤昭氏が東京都文京区で創刊。平成十六年四月、松澤雅世氏が主幹を継承。「心象造型」を理念としている。隔月刊。

主幹詠「秋の刻」十句より四句。

今生はあの手この手の草むしり
キリストもアラーもままよ夏野原
ほうほたる弱虫泣き虫曳きつれて
古墳から隈研吾へと夏の風

第一句、人生は自分の意に添わぬ事が夏草のように繁茂する。それを作者はあの手この手を使い、半分楽しみながら退治している。第二句、現在の世界情勢の揶揄か。「ままよ」という感動詞の使い方が秀逸。「夏野原」は国連安保理が機能不全に陥っているウクライナやガザの現状を思わせる。第三句、わらべ唄「ほたるこい」のパロディーか。弱虫泣き虫を曳きつれて水辺に蛍を追う光景は郷愁を誘う。第四句、隈研吾氏は、木材を使った、和をイメージした作品が多く、新国立競技場をデザインした世界的な建築家と側聞している。古墳から現代の最先端の建造物に吹いて来る「南の風」とは日本文化論を孕んだ風か。不思議に魅力的な句である。

本号は創刊六十周年記念号である。「特集四季彩詠」として会員十九名の各十五句とエッセイが掲載されている。全二八五句はいずれも力作である。それより共鳴句を十句。

熱帯夜「文藝春秋」遊びをり　伊東　類
ぽやけてきたる人類の去年今年　広井　和之
しあわせのふりしてくずすかき氷　佐々木克子
しやぼん玉ふらり天女になりきつて　石井　長子
早春の薄さで包むオムライス　瀬藤　芳郎
梅一輪一歩も退かぬ白さかな　藤井　康文
戦争は陽炎のままやつてくる　村井　一枝
貝殻になつて初めて秋の音　石川　綾乃
梟の後の正面風ばかり　倉林ひとみ
語り部の使命は新た日脚伸ぶ　江島　昇一

第二句の作者広井和之氏は『四季』に「広井和之ノート」を連載している。本号は「『戦争による領土拡大の禁止』に向けての現実的努力の本流を見失うな」の題で、種々の国際法を根拠に戦争による領土拡大の違法を論証している。第八句、コクトーの「私の耳は貝の殻　海の響をなつかしむ」を彷彿させる。第十句、作者のエッセイに依れば被爆者との事。語り部として生き抜く意思を託した季語が読み手の胸を打つ。

写生を超え、眼前の実景を心象風景に深める「心象造型」を理念として、一路邁進する会員の熱意が伝わる一書である。

十一月号の巻頭句

季音雪　萩の風縺るる蝶を道づれに　森本早苗

季音月　束ぬれば沈金の艶秋の草　大場順子

季音花　追憶の「ゴンドラの歌」秋の夜　日髙道を

水明集　水盤の余白が語る華の道　菅原真理

鼓笛集　男衆もさつと化粧の辻踊　菅原卓郎

山紫集　御仏の顔彫る朝涼新た　湯浅和

水明の記事掲載他誌より転載

本阿弥書店『俳壇』八月号
俳壇ワイド作品集……今月の有力同人

夏紀行

五明　昇［水明・鳥羽谷］

卯波立つ神代の島の里神楽
天下布武若葉を鎧ふ安土城
棚田向くホームのベンチ風薫る
老鶯や水場に憩ふ山ガール
打水てふ人待つかたち京の路地
串打ちの青きバンダナ夕薄暑
山滴る伊勢へ十里の道しるべ

◆**作句信条**

人生は大きな旅路。故郷信州に生まれ、縁あって東京に職を得、関東の一隅に暮らしているが、やがては故郷の菩提寺の土に還ることになる。旅路の折節に詠んだ俳句は旅先から郷里へ出す「旅信」、仮初の旅を仮初としない努力を今後も続けてゆきたい。

五明　昇（ごみょう・のぼる）
昭和19年長野県生まれ
平成22年「水明」同人、同25年「鳥羽谷」同人、同26年「水明」季音（無鑑査）同人
埼玉県俳句連盟参与、浦和俳句連盟副会長、現代俳句協会会員
句集に『花林檎』『道草』『旅信』

本阿弥書店『俳壇』十一月号
俳壇ワイド作品集……今月の有力同人

秋　愁

青木鶴城［水明］

秋の風愁ひ一つを引き連れて
一日（いちじつ）を走り続けて法師蟬
金剛杖の上るきざはし萩枝垂る
星月夜体内時計狂ひ出す
戦争の記憶のうすれ残り菊
天の川意外に長き運命線
郷の子は絶滅危惧種赤まんま

◆**作句信条**

私は作句において、文字の奥に秘められたメッセージ性を信条としている。勿論花鳥諷詠にも素晴らしい句が沢山あり、心地良い気持ちにさせてくれるのだが、何か物足りないものを感じてしまう。読者にメッセージの余韻を感じて頂ければ幸甚である。

青木鶴城（あおき・かくじょう）
昭和24年10月8日生まれ
平成29年「水明」入会
令和元年『新珠賞』受賞
令和3年『水明賞』受賞

山本鬼之介　選

水明集

さいたま　反町　修

赴任地にひとり手酌の今年酒
離れ座敷の粋なまらうど添水鳴る
変幻の無数の鰯一と化す
秋夕焼三井の晩鐘響きけり
凛として女系家族の生身魂

梅澤輝翠

色鳥やインク濃くなるガラスペン
落鮎が大義をなして大海原
色褪せし麻紐ほどく秋簾
飾り包丁鮭の切り身の色香よし
吹かれ来て葉に縋り付く秋の蝶

さいたま　岡田宣子

秋簾置屋の奥に人の影
秋簾巻き浜の黄昏一望す
宵闇やビルの谷間の祠の灯
これよりは信濃路なるや蕎麦の花
蕎麦の花辿り本家の霊廟へ

熊谷　越田栄子

文机の窓辺に果つる法師蝉
涼新た田んぼアートを揺らす風
コスモスや芯に強さを秘めてをり
積みあぐる月見団子の不揃ひに
ゆつくりと雲の流るる十三夜

さいたま　篠﨑紀子

淙淙と流るる谷や秋の水
金木犀の夜風に二人立ち止まる
晩鐘や金木犀の香りのせ
ななかまど少々斜め座りかな
秋遍路斜月が肩にふりそそぐ

伊奈　菅原卓郎

宵闇に揺るる比丘尼の手燭かな
食み跡にしるす生き様下り鮎
秋の燈や杜氏刈り込む酒林
秋燕見送る海人の孤舟かな
方墳に鳥の声無し秋旱

秋色のひと刷毛風の武蔵野よ
日射し浴び踊る影絵や秋の蝶
湯の街の先は秋色日本海
金秋や想ひ出たどる飾り棚
少年の頑なな恋青蜜柑

先生になりたかつたの吾亦紅
秋高し舟子まかせの瀞下り
判読に悩む癖字の秋便り
宵闇や連れ添ふ影もなく独り
宵闇や灯り点る家点らぬ家

さやけしや座上の客の江戸小紋
風鎮を翡翠に替へて新豆腐
それぞれの小石に夕日秋の水
法師蝉幌をたたみし乳母車
蜩や君のアドレスだけがない

静謐のビル街零す盆の月影
来世より還るこの道盆の月
素焼皿に雲の白さの新豆腐
持て成しの肴は塩と新豆腐
森の音の粋な転調水の秋

さいたま　菅原真理

清水桂子

池田珪子

皆川更穂

王宮の壁にバレエの影良夜
胸に竜胆女流句会は丸ビルで
星月夜旅のマストに絵の人魚
付き纏ふ探偵が踏む秋の蛇
此岸への胎児の帰還星月夜

木犀や香りを纏ふランドセル
秋水や津和野に太き鯉粲粲
秋水に平たき石を二三投
木犀や開かずの窓を開くる朝
微酔の足を止めたる金木犀

玉藻引く水のさやけき宇治の郷
戦場のピアノ狂はず秋白し
天の川三笠の山に湧き出づる
名人の上方落語夜長かな
雨月かな白磁の盃をいざ酌まん

京町家生菓子にある秋の色
尾根に出てかじる林檎や遠く富士
それぞれに秋の色噴く万の木木
撫子の虜になりし幼かな
秋の蝶精いつぱいに今を飛ぶ

さいたま　森下山菜

新　暦文

小林京子

西幅公子

秋めくやジャワ更紗売る白い店
秋の色野辺に広ごり遠筑波
秋色や写楽ゆかりの寺の道
俊足のヒーロー今も青蜜柑
重陽や孤食の席に菊花の茶

越谷　阿部幸代

やるせなき舞台の余韻秋さびし
早起きの庭に白露見つけたり
レコードの音色懐かし雨の月
宵闇や三味の音漏るる路地の奥
バス待ちの我にわらわら赤蜻蛉

平塚　丸屋詠子

素麺を食べ尽くす日の空の色
見上ぐれば秋色の風吹きにけり
シニア割少し戸惑ふ秋初め
古書店の微笑む女優秋の午後
珈琲にセロの音溶くる秋の暮

さいたま　元田亮一

秋の水揺るる樹形の影沈め
石橋の裏側映す秋の水
隠居所の歴史百年銀木犀
木犀の匂ひにむする檀那寺
秋深し斜陽の部屋に古書の山

霜多光代

薄緋の空へ鳥立つ野分あと
秋澄めり心新たに捺印す
虫の音に包まれてゐる孤独かな
爽やかに恋人連れて甥不惑
法師蝉手話の伝ふる核なき世

さいたま　綿引まりこ

登高し祠の神と冨士拝す
冨士塚の木陰でなぞる芭蕉句碑
供ふるや娘を偲びマスカット
高貴なる翠よシャインマスカット
現世の人の行き来や盂蘭盆会

杉戸　佐々木史女

遠ざかる少女の笑顔花野道
仏塔の高き九輪や秋夕焼
ショパン弾くフジ子のピアノ身にぞ入む
終末を看とる医師の目秋灯下
宵闇は瞬時の虚空なぞめくや

さいたま　山岸久美子

今生の氷菓ひと匙半匙と
銀漢や銀の指輪の寡婦となり
しめやかに二礼二拍手芒揺る
白玉や戦力外となりました
初秋や蛇口の水をやや細く

本橋稀香

日光の鳴き龍の声秋の夜
故郷の野山に抱かれ秋の夜
枝豆や株間五寸の鞘太し
座禅する蝋燭の部屋秋の風
反省の正座せよとやちちろ虫

さいたま　千坂平通

星河ゆく千の折鶴銀の翼
八千草の移り香まとふ影二つ
方言に温もる心秋の旅
残り香の薄闇独り秋簾
銀漢の粒となれるや今宵なら

吉川　杉浦千祐

秋すだれ入り日織り込む黄八丈
痴話げんか不意に小声に秋簾
枝豆や暮るるに早きほまち畑
隧道を抜くればにはか星月夜
両国に韃靼の風九月場所

さいたま　森美枝子

過疎の里野にいちめんの蕎麦の花
昨夜の雨濡らす敷石涼新た
利酒や下戸の主が音頭とる
新走聞きつけ郷の上戸者
みちのくのお猪口は厚手新走

加藤でん治

木下闇なにか目論む羅漢達
滝垢離の行者の気迫水しぶき
金魚玉家族の団欒映り込む
秋近し屋並に綺羅と花手水
名刹の贅を張りたる菊の鉢

さいたま　香田裕誌

居残りの作業続く日秋燕
今もつて昭和は続く原爆忌
畑のもの挽ぎきて供ふ盂蘭盆会
茗荷の子認知機能の検査室
昨日まで傍に居た人曼珠沙華

若狭　山﨑郁子

祖母作る月見団子のほの甘き
秋の暮回転木馬の達成感
静けさを求め迂回の九月尽
月の客これで全員いざ乾杯
ゆく人の心を灯す秋の薔薇

さいたま　山戸美子

夜学して味噌が周りの味噌握り
鰯雲誰も彼もが地球人
雨の月屠殺人では無き僕は
栗飯や老若男女の大食堂
小鳥来て幸せの種ばら撒きて

吉川拓真

処暑なりぬ羊羹ひとつ旅の空
帯ぽんと弾む足取り秋涼し
雲に乗り漫遊したき涼新た
太陽の出づる讃歌や秋茜
新涼や白河夜船の岸に着

さいたま　鈴木香音子

西の出窓に秋の簾の選りすぐり
丹精の撫子咲くや紅の艶
飾り包丁して万全の月見膳
遊歩道の小花に集ふ秋の蝶
夏の葉が積み重なりし庭の秋

小川洋子

秋出水おほひかぶさるごと怖し
秋出水過ぎ仏壇に手を合はす
虫の音のはや聞こえ来る夜半かな
地下鉄を出づ秋空の清清し
真つ直ぐに時をたがへず曼珠沙華

高原和子

酒蔵の鏝絵眩しく新松子
白波の見ゆる街道新松子
石垣は野面積とや新松子
爽やかや白き軍手の庭仕事
側転の少年皓歯爽やかに

森　和子

足場組むとびの女や鰯雲
宵闇や庚申塚の蠢かむ
宵闇のジョギングの人たれだらう
この判断如何にしやうか碇星
飽食の時代に生きて秋彼岸

さいたま　飯田忠男

自尊心向かうに放り濁り酒
町空の赤き日暮や鰯買ふ
鳴き交はす椋鳥けふも自由なり
海暮れて給水塔に雁渡し
頭から鰯食む母白き鬢

川口　新井のり子

関門を難無く突破葛の蔓
朝顔や日日繋盛のレストラン
翻り白さを残し秋つばめ
女生徒の弾けし笑顔柘榴の実
花野ゆく風に生まれし葉音かな

若狭　岡本祥子

木洩れ日もせせらぎも皆秋の色
一軒家をとりまく秋の簾かな
秋光に映ゆる彫刻聖天山
庭師伐る枝山積みに盆用意
撫子や夫と登りし伊吹山

さいたま　森下美智枝

秋風や足取り軽くポストまで
秋風や床屋帰りに仰ぐ空
長屋門並びし通り秋の風
竹垣の小菊の残る狭庭かな
残菊戸棚の奥の軸二本

さいたま　寺町知子

海へだて開く花火の音は無し
虫の声子に読む本のきりも無し
秋雨の斜めに浮かぶ街灯
トロ箱に鰯満載魚市場
福祉課の手話の応対秋澄めり

湯浅　和

風の中子等流し索麺競ひ合ふ
冷索麺喉元過ぐるおいしさや
揺り椅子に身をまかせをり青簾
簾越しの風のまろきや沖遠く
日輪の天頂にあり冷素麺

後記朝香

爽やかに喉越す蕎麦の腰と角
爽やかにマイクを摑み腰を振る
宵闇や秩父社の酒の樽
落人の部落に蕎麦の赤き花
山あひの青き段丘蕎麦の花

秋谷風舎

コスモスの絨毯に乗る富士の山
コスモスに顔埋めたる恋始む
青き空笑顔あふるるコスモス野
コーヒーの木のぐんと伸びたる月今宵
ママさんバレー勝利の一杯月見酒

さいたま　緒方みき子

海岸を泡立ててゐる長月かな
秋の夕薄い時間を過ごしけり
手を焼きてやんちやな仔犬竹の春
ふるさとの妣と桔梗に会ひに行く
訪ふたびに黄になりたがる花芒

所沢　関根千恵

佳きひとの訃報届きし白露かな
白と黒雲の引きあふ運動会
秋の空怒りと祈りは紙一重
真打ちは後から出ます栗ご飯
入道雲負の気分のむくむくと

東京　畑宮栄子

芒原風の呼子にうねりけり
爽やかに高原撫づる雲と風
渡良瀬の川面にしなふ芒かな
爽やかに風の指揮者や葉をゆらす
一村に大合唱の法師蝉

さいたま　篠原さよ子

スタートライン斜に構ふれば赤蜻蛉
雲を浮かぶる水溜りてふ秋の水
新涼や目覚めて白湯の旨きこと
新涼や茗荷三つ四つ御福分け
鈴虫や鳴く様じつと息を詰め

さいたま　鳴海順子

「なんとまあ」子供数多の夏まつり
軽きうそついて「さよなら」花火の夜
水不足大仰の態日日草
校庭の御化け胡瓜や夏休み
日時計の指針影なく油照り

綿貫ひさの

秋あかね旧街道にそば処
芒原風神雷神どよめきて
鷹渡るやうやく九々の言へる児に
選に落ち亦選に落ち雁来る
コスモスを両手に姉の三回忌

山下ユリ子

宵闇の迫る一部屋灯しけり
満たされぬ吾の心や蕎麦の花
『こころ』読み墓地に手向くる蕎麦の花
バスの旅遠く近くに蕎麦の花
ま白なる蕎麦の花こそゆかしけれ

糸井しるく

石仏の袈裟にとまれや赤蜻蛉
岸壁で鯊釣る翁恵比須顔
宵闇やバーガー食べて友と待つ
蕎麦の花白ちりばめて茎赤し
蕎麦の花白く輝く祖父の山

さいたま　小駒さち子

宵闇や赤色灯の回る街
宵闇の家のあかりや靴の音
村歌舞伎手燭ほんのり蕎麦の里
一面の蕎麦の花より至仏山
風雨に耐へ規格の梨の重さかな

樋口元美

三歳児の自画像秋の陽に映えて
敬老の日自分らしさの朝の顔
鰯焼く匂うれしき隣家かな
秋彼岸暑さ一掃風渡る
手捌きの鰯の味は旨いはず

川口田村福美

魚は跳ね炎天の海波光る
草生すや水に隠れし台場跡
夏空にツリー屹立隅田川
夏の雲遠くゆれ飛ぶ航空機
屋形船河面を映すビル明かり

さいたま　持谷寿夫

老犬に歩み合はせて星月夜
あれやこれ選びそこねてこぼれ萩
桃ひとつ福島産を求めたり
大根蒔く庭の片すみかたづけり
妹は黄泉にゆきけり酢橘もぐ

鬼石　榊原聰子

残暑続く吉川文学辞書片手
朝まだきはつかな風の秋意かな
仏手柑の招く寺あり奈良を行く
水道の水にも秋意ありにけり
鳥渡るほのときざせし旅心

枚方　寺内洋子

起き抜けの水の匂ひに秋気配
外灯を消せば俄に虫の声
野仏をはんなり飾る彼岸花
わやわやと祖父の思ひ出栗が爆ず
忘れ得ぬ後姿や鶏頭花

和歌山　嶋田洋子

新涼や納得のいく最終話
新涼の澄みきる柝の音幕開けり
鈴虫の隅田のほとり木歩の碑
火の記憶語らぬ祖母の震災忌
白木槿隣の家は代替り

さいたま　羽島秀子

勝角力祝親方の誕生日
香りごと買ふ新豆腐二人連れ
夜半に鳴く蚯蚓お主も独りぼち
蟋蟀や鍬の手休め去ぬを待つ
野良猫の大団円や月に吠ゆ

さいたま　鈴木藻好

秋簾ロック漏れくる京の路地
よく喋る少女三人紅木槿
口ずさむ九ちやんの歌星月夜
爽やかや少女の仕切る応援団
爽やかに席を譲る子鼻ピアス

大熊健司

新しき季寄せ買ひたり今日の菊
灯火親し古今集などひもとかむ
秋の風受けて川辺をペダル漕ぐ
早朝に幼児手を振る秋意かな
若者の歩幅に合はす秋意かな

和歌山　南條きわゑ

ばあちやん子の拾ふ落穂や学校田
稲刈るや行楽の人横を過ぐ
実石榴や餓鬼大将の戦利品
秋の雲大気の果てを見渡せり
見返りを求めぬ母の栗の飯

若狭　松村登美江

秋晴や快音爆ずるネット裏
秋澄むや矢を番へたる黒袴
いい風のたびどんぐりのかろころと
地下鉄の出口違へて秋の空
夕暮の線路のむかう秋の風

さいたま　石関六弦

高々と蟷螂の斧だとしても
蟷螂や生くることまた寂しくて
青き空ひとり蟷螂瞑目す
庭下駄に真白き萩のこぼるるを
立つひとに声かけぬまま萩の庭

東京　山中いちい

「パプリカ」を復習ふ笛の音秋の川
塗盆に三個ころんと烏瓜
おにやんま池塘ひらりと横切れり
くもの巣に絡め取らるる葛の花
肉そぼろたつぷり載する秋茄子

さいたま　石井直子

空の道迷ひ捜すや秋の蝶
陽と水を詰め込みし梨ぞうげ色
種とばし命めぐらす花野かな
松虫草夕雲の中浮く遠嶺
秋桜やてんでに向きてゆらぎをり

蛭田律子

月見るや通勤電車の遅延中
突出しと九谷の盃月まつる
盛り塩を先づは厨へ月まつる
青空をキャンバスにして秋桜
秋桜黒姫山の裾野映ゆ

所沢　飯室夏江

ご褒美は富士山頂からの夏雲
予告せず帰り来る子や赤とんぼ
かすめ行くトロッコ列車秋の川
秋の川行き着く先の旅の宿
入院を告げられし母秋の声

さいたま　木谷葉子

宵闇やテールランプの赤忙し
宵闇や主なき庭の折鶴蘭
藪枯らし引き抜き払ふ老女居て
舞茸が飯豊帰りのザックから
花茗荷友と見つくる下山道

前田英子

蒼天に蕎麦の花満つ段畑
花蕎麦や札所参りの道すがら
尾道の映画の坂に秋夕焼
宵闇のドライブ目指す赤城山頂
宵闇やひとり秘蔵の古酒を酌む

横山礼子

情報に右往左往の盆休み
大漁の網の鰯の光跳ぶ
図書館に一時読書秋暑し
初嵐町内を飛ぶポリ袋
秋出水スピーカーから注意報

さいたま　武田重子

窓開けて手櫛で秋の風通す
手作りの梅干のせて豆腐食ふ
車椅子孫が付き添ふ敬老会
数珠珊瑚一枝剪つて供花とせり
果皮裂けり異常気象の青みかん

藤沢　小島喜代子

爽やかな笑顔に隠す拳かな
法師蟬声援あがる甲子園
法師蟬重き四年の長さかな
ベランダの葉陰に覗く西瓜かな
ポケットにまさかの現金秋の空

さいたま　川島夕峰

敬老の日や軽老と書き苦笑ひ
涼新たアールグレーの軽やかさ
鈴虫や窓辺に誘ふセレナーデ
鈴虫の声に戯れもう一杯
朝陽浴び盥に游ぐ新豆腐

草加　持永喜夫

新涼や復帰初日のハイヒール
フル充電されて目覚める涼新た
新涼や半年前に買ひたる本
鈴虫やスマホさはらぬ夜時間
鈴虫や通信衛星飛ぶ宇宙

さいたま　岡田芳春

昼日中さるすべりの花自在なり
朝顔の青紫の終ひ時
子規の忌や気を永うして糸瓜水
手折りきて薄の風が吹き抜けり
子規の忌の根岸に羽二重団子かな

東京　柳父はる

うつろ舟青桐の種風に乗る
まつすぐに秋色を分け「いなほ」ゆく
小半時新蕎麦目当ての雨宿り
シャリンドドン山車引く吾子は祭デビュー
苦吟して推敲の末の夜食かな

さいたま　駒谷行雄

さるすべり小さなつぼみ風にゆれ
秋風や小学生の笑ひ声
青青と光の中のなつめの実
坂道や右に左にひがん花
たれさがるひとふさ重き青ぶだう

鬼石　加藤ナヲ子

枝豆の摘む指先白く伸び
年下は枝豆好きでキスが好き
枝豆をはこび豊かな房摘む
秋の灯に歯抜けおやぢの笑ひ顔
秋の灯の盛り塩高し老舗宿

さいたま　北山建治郎

ふつくらとこれぞ枝豆里の卓
「枝豆かあ」言ひつつ止まらぬ手と手かな
サウナ入る酒と枝豆楽しみに
傷心の旅の半ばや秋灯し
秋の灯よ俯きて行く影ひとつ

北出久美子

三十号油彩描き了へ今朝の秋
丘の上のバス停風は秋の色
貧しくも明るき戦後青蜜柑
青蜜柑少女の瞳未来へと

宮代　関谷多美子

新涼やブルームーンと云ふ言葉
太陽の塔の丸顔小鳥来る
尻を上に綺麗に並ぶ長十郎
秋の蚊を見放つけふは七回忌

大阪　遠藤人美

うねりつつ秋へ秋へと銀の波
独り寝に秋風ページめくり終へ
ちろちろと帰路照らすかに虫の闇
星の夜繋ぐ命や虫すだく

大阪　飯塚智恵子

爽やかに貴方はお洒落衣を選ぶ
バイク止め爽やか顔が俳優似
新松子大地に根付き吹きかへす
爽やかに女子高生も僧になる

さいたま　落合和枝

残菊や名残り惜しむか秋の蝶
襟足をそつとくすぐる秋の風
漂ひて隣家の夕餉秋の風
内定をもらひやつとの秋休み

小田三茅

嬉嬉として春の江の島児に戻り
江の島や春の遠足姉と会ふ
風の乱やうやく止まり盆踊

藤沢　藤田寛二

☆　☆

作品評

山本鬼之介

変幻の無数の鰯一と化す　反町　修

水族館の大きな水槽の中で、鰯の群れが巨大な塊になり、常に形を変えて泳いでいるのを観た人が多いと思うが、日頃食卓に載った鰯を見ていると、集団行動での姿など思いも寄らないことである。鰯の大群が黒くまた銀色に輝いて様々に形を変化させ、右か左の一定方向に回りながら泳いでいる。海の中でも同様の行動を取っているのであろうが、何のためかと云うと、①鮫や鮪などの大きな魚すなわち外敵に対して巨大な生物に見せかけて防衛すること、②同時に集団の中に居れば襲われても捕食される確率が少ないこと、③集団行動による大きな流れの中に居れば泳ぐのに必要な消費エネルギーが軽減できること、と云う説明が為されている。

水族館の鰯の水槽を見てみると、偶にハート形になったりしてびっくりするが、作者は一瞬刀のように真一文字になった鰯の群れる姿を観たのであろう、その時の興奮が小気味好い俳句になった。

吹かれ来て葉に縋り付く秋の蝶　梅澤輝翠

蝶が春から夏を過ぎ、更に秋ともなればその動きも弱々しくなり、飛んでいる姿よりも花や木や石などに止まってじっとしている蝶を憐れっぽく見ることの方が多いように思う。掲句の秋蝶もこの一例であろうが、秋風に煽られてきたことで一段と弱々しさが現れている。少々譬えが悪いが、忘年会シーズンに深酒をした酔っ払いが駅のホームをよろよろと危なげに歩き、ベンチに座ってしまうような感じかと思うが如何であろう。地に落ちそうになって必死に木の葉の摑まっている秋蝶の姿を、作者は俳人の眼で観察している。

秋簾置屋の奥に人の影　岡田宣子

置屋は、芸妓や舞子・半玉を抱えている家で、一般的には「おかあさん」と呼ばれる女主人が生活の世話をして、検番または料亭・茶屋などからの注文に応じて抱え妓を派遣する。京都の花柳界を散策すると、祇園や先斗町などにある置屋の玄関に、抱え妓の源氏名が書かれた小形の表札が掛けられていて、粋な気分に浸ることができる。

さて、本句の置屋が何処にあるのか、作者の創作によるものかなど、野暮なことは問わぬことにして、秋簾と置屋の奥に居る謎の人物について触れてみたい。同じ秋簾でも一般家

庭のものとは違って、粋筋に相応しい瀟洒ものであろう。また、掛けられている場所も建物の外側とは言い切れず、屋内の廊下とか座敷を仕切る場所にあるものとも受け取れる。筆者としては、屋内にある秋簾の方が情緒が高まるのではないかと思う。さて、奥に居る人物は何者なのだろう。この家の住人ではなく普段はこの家に居ない人と云う前提で、これ以上の詮索は頭の回転の速い人にお任せすることにしよう。

文机の窓辺に果つる法師蝉　越田栄子

洋式の生活が一般化して、畳の部屋を持つ家が少なくなった現今において、畳の部屋に置かれている文机の存在は大変貴重である。この句の和室の書斎には文机が置かれていて、窓の外には小体な庭があり、四季を通じて色々な鳥や昆虫が訪れ、庭木が花を咲かせる。ある初秋の朝、文机の脇の窓を開けると、一匹の法師蝉が短い命を閉じて横たわっていた。それを見ての追悼句のように受け取れる一句である。

秋遍路斜月が肩にふりそそぐ　篠﨑紀子

秩父路の秋遍路であろうか。高い処にある札所もあるので、二三日かけて数箇所を巡るにしても時間がかかり、宿に帰りつかない内に夜になってしまうこともあるだろう。取り上げた句は、そのような様子を伝えている。一日の行程で大分くたびれており、腹も元気がなくなってきたので足取りが重い。「斜月」がこの人を元気づけている。

秋燕見送る海人の孤舟かな　菅原卓郎

春に渡ってきた燕が、雛を育て上げて九月頃集団をなして帰って行く。毎年同じ人家や建物の中に営巣する燕が多いので、人間にとっては親しみ易い鳥であり、迎えた時の高揚感とは逆の淋しさを感じるのだと思う。「海人」という文字から判断して、一人か二人の小舟を使う漁師であろう。秋燕との別れを惜しむ場所が海ではなく湖だとすれば、一層味わい深い俳句になる。

少年の頑なな恋青蜜柑　菅原真理

一人の異性を一途に思って突き進む少年の恋なのか。相手は同年配の少女なのか、それとも二十歳を過ぎた大人の女性なのか、場合によっては、学校の女性教師という可能性もある。周囲の意見を耳に入れず、自分の意志を貫こうとしている。季節を先取りして店頭の一画を占める青蜜柑は、見た目がいかにも酸っぱそうであるが、食してみると案外美味い。この少年の恋もやがて色づくことだろう。

宵闇や連れ添ふ影もなく独り　清水桂子

名月の後、月の出が次第に遅くなり、月が上がってくるまでは、人工的な照明が無ければ必然的に暗さを実感しなければならない。作者は、夫が存命中には意識しなかった月の無い夜の暗さを、ふと感じたのであろう。その気持の延長が、明るい室内にまで及んだのであろうか。夫婦で生活している頃には感じなかった寂寥感であろうが、やがて中天に上る月の光によって心が満たされてゆく。

それぞれの小石に夕日秋の水　池田珪子

上流の河原に敷き詰められた小石であろう。その一つ一つに秋の夕陽が射し込み、小石が影をつくっている。それを見つめている作者の心の中に、いま子供の頃の想い出が甦ってきた。美しくそして哀愁に満ちた秋景色である。

森の音の粋な転調水の秋　皆川更穂

秋の森の中にはいろいろな音がある。野鳥の鳴き声、風が揺らす木々の枝や葉のさやぎ、樫・櫟・楢などの団栗の落下音、様々な落葉の音、冒険ごっこの子供の声……。このような様々な音が、名指揮者と演奏者による交響曲のように、絶妙な音の世界を作っているのである。

星月夜旅のマストに絵の人魚　森下山菜

明解な鑑賞が難しい俳句であるが、「旅のマスト」という言葉から大型の帆船か大型のヨットを思い浮かべる。大海原の空を埋め尽くす星は、地上では眺められないような見事な景観であろう。一方「人魚」からは、アンデルセンのおとぎ話を筆頭に、限りないロマンをかき立てられる。とにかく、マストに人魚の絵が描かれている船での旅を夢見るだけでよしとしよう。「人魚の絵」ではなく「絵の人魚」であるところに、人魚と係わり合う作者の能動的な意識を認めた。

木犀や開かずの窓を開くる朝　新暦文

謎を秘めた俳句である。「開かずの間」や「不開（あかず）の門」には、「忌むべきものとして開けるのを禁じている」という意味があるが、本句の「開かずの窓」もこれと同意なのであろうか。筆者は全く違うように読んだ。これまで偶々開けたことのなかった窓を開けて、折しも芳香を放っている木犀の香を部屋に導いた、と受け取ったが、作者の句意は如何に。

雨月かな白磁の盃をいざ酌まん　小林京子

仲秋の名月が雨のために全く見えない状態の「雨月」であるが、はかない望みも叶わず一向に雨の降り止む気配がない。「えい、儘よ」と、秘蔵の白磁の盃を持ち出し、取って置きの吟醸酒を出してきて、お月さんをそっちのけで豪快な酒宴

を押っ始めた「おなご会」なのである。

京町家生菓子にある秋の色　西幅公子

京都の町を散策すると、その町の景観にしっとり溶けこんだ和菓子の店があり、つい足を止めてしまう。何れの店も代を重ねた老舗で、京都ならではの著名な社寺や茶道や華道の家元、花柳界の料亭やお茶屋などに永年の顧客を持っている。掲句の店も多分その中の一軒であろう。紅葉の色を生菓子で演出した逸品で。食するのが惜しくなる銘菓である。

秋めくやジャワ更紗売る白い店　阿部幸代

ジャワ島を中心にした地域で作られた更紗を商う店である。爽やかな綿布に染め上げられた色や柄に特長があるようで、愛好者にとっては掛替えのないものだろう。「白い店」は少々乱暴かと思うが、外装や内装を白で統一してある店かと思うので、俳句表現としては至極妥当かと思う。

レコードの音色懐かし雨の月　丸屋詠子

近年昭和四十年代のレコードブームが再来したように聞いているが、この句の作者も子供の頃に家庭で聴いたレコードの柔らかな音色を、記憶の底から引き出しているのであろう。折角の名月が雨で見られないが、窓を打つ雨の音がレコードの音色と結びついたのかも知れない。

珈琲にセロの音溶くる秋の暮　元田亮一

哀愁を帯びた秋の夕暮時である。自宅のリビングかそれともレコードの名曲を聴かせる拘りの喫茶店なのか。チェロの独奏と判断したが、あの大きな胴から発せられる四弦の深く艶のある音色には誰しも魅了されるだろう。その音色が珈琲に溶け、聴覚に加えて味覚でも感じていると言う表現がよい。

石橋の裏側映す秋の水　霜多光代

大きな橋ではなく、野を流れる小川に掛かっている橋かと思う。澄みきった大気の中を、清らかな秋の水が流れている。永年何の変哲もなく季節の移り変わりと共に役目を果たしてきた橋である。その裏側など見た人はいないと思うが、作者は、その下を流れる水に映る橋の裏側を見ようとしているのだろうか。なかなか興味の湧く俳句である。

虫の音に包まれてゐる孤独かな　綿引まりこ

作者は、虫時雨の真っ只中に居る。とても賑やかで楽しい気分になれそうだが孤独だと書かれている。盛大な虫の鳴き声は虫の世界のものであって、其処に居る自分のためのものではないと思った時、裏切られたような孤独感が現れたと云うことなのだろう。

水琴窟

（夏季競詠・十月号鑑賞）

池田雅夫

沈黙のかけらを拾ふ団扇かな　篠﨑紀子

長い「沈黙」を打開すべく、せわしく「団扇」を動かしている光景が目に浮かぶ。どういう経緯で沈黙になったかは定かではないが、気まずい雰囲気を一刻も早く改善しなければという思案のあれこれが「かけらを拾ふ」に表われている。

碁敵の忙しく扇ぐ古団扇　加藤でん治

普段は何をするにもいつも一緒の二人。こと囲碁となると一歩も引かない。長考をくり返し真剣勝負さながら。その度に団扇を小刻みに動かすのだ。若さを保つ秘訣であろうか。勝負が終われば仲良く二人で酌み交わすのであろう。

縁台の勝負を煽る渋団扇　新暦文

こちらは将棋のようだ。いずれにせよ勝負に対する執着心には恐れ入る。対戦相手を含め、勝負そのものを煽っているので、より臨場感が強い。「渋団扇」からは、数十年来の友人であると想像される。団扇は夏の風物詩であった。

寝入る子に団扇の微風昼下り　反町修

「団扇」と「眠る子」の組み合わせの句は断然に多い。掲句は「昼下り」とあるので昼寝をしているのだろう。「団扇の微風」に、すやすや眠る子の寝息が聞こえてくるようだ。

人を待つ風情廃家の夾竹桃　丸屋詠子

強い夏の日射しに映える夾竹桃の花。今では廃屋となった旧家の庭に咲いているのだろう。管理する人もなく荒れ放題の庭は無残であるが、かつての賑やかな家の人々が帰って来るのを待っているかのように「夾竹桃」は咲いているのだ。

団扇風シャツの第一ボタン開け　山﨑郁子

梅雨明け前の暑い日かも知れない。長袖シャツであろう。「シャツの第一ボタン開け」と具体的に示し、その映像を印象づけている。寒暖の差が一日で一〇度以上もある異常気象の昨今。「団扇」の効力にも限界があると痛感している。

きざはしの動かざる影夾竹桃　綿引まりこ

「きざはし」は「階」と書き「階段」のこと。大気汚染に強いとされる夾竹桃は街路樹としても多く植えられている。主要道路の歩道橋の階段は強い日射しに照らされ、くっきりと影を落とす。根元から分かれる枝は密生し濃い影をおく。

リハビリの一歩一歩や夾竹桃　後記朝香

夾竹桃の花期は6～9月と長い。リハビリの施設、あるいは自宅に夾竹桃が咲いている。日々のリハビリに精をだし、一ヶ月、二ヶ月と過ぎ、足の動きがだいぶ回復してきた。リハビリの期間ずっと咲いていた夾竹桃に励まされたのだ。

なつかしき路地の板塀夾竹桃　秋谷風舎

ひと昔前までは各所の跡地に「板塀」がめぐらされていた。未だ残る板塀の路地に夾竹桃が高々と咲いていた。その光影に若かったころを思い出している。狭い路地で「ベーゴマ」「メンコ」や「かくれんぼ」など、懐かしい思い出である。

息災に暮す余生や夾竹桃　香田裕誌

ここでの夾竹桃は白花が似合う。一時代を築いた若かりしころもあった。大志を抱きがむしゃらに働いたことも今では遠い昔のこと。意のままに自由に暮す余生。白花の夾竹桃の涼しげな雰囲気に日々の暮しを重ねているのだ。

観客の団扇の止まる大一番　鈴木藻好

大相撲の観戦であろう。目の前の力士の体の大きさや気迫に圧倒され、気持ちも熱くなるというもの。期待のかかる注目の「大一番」に、持っていた団扇が止まってしまった。

見沼田の保存緑地の光る夏　山岸久美子

荒川を挟む見沼代用水の東縁と西縁。そこに広がる見沼田んぼも年々狭くなっている。自然を守るための「保存緑地」が点在している。夏の日射しに眩しく光る保存緑地。「光る夏」が精気に満ちた豊かな「見沼田」を描きだしている。

夾竹桃赤し賽の目の赤し　遠藤人美

「夾竹桃」の花の「赤」と「賽の目」の「赤」を対比させたところが独創的である。実際には手元にないであろう賽を連想する力をだいじにしたい。掲句は、九・八の破調であるが、基本は五・七・五であることを心に留めておきたい。

ごはんよと母の呼ぶ声夾竹桃　羽島秀子

「母の呼ぶ声」と「夾竹桃」の関連性を探ってみたが見つからない。取り合わせとして拝読する。その昔、夕飯時になると、母が「ごはんだよ」と皆を呼んでいたことを思い出す。一般家庭の共通した光景である。夾竹桃に日常性を感じた。

保守整備の握り拳の汗ばみぬ　篠原さよ子

「保守整備」を「保全整備」として解釈した。鉄道などの点検保全であろう。最終列車の通過後から始発までの僅かな時間での作業。「握り拳の汗ばみぬ」に臨場感がある。

大村節代　選

鼓笛集

令和の世昔ながらの赤い羽根
長き夜の羊の数は億を超え
花木槿令和の世にも色を添へ

持永喜夫

着陸の待機の旋回秋の空
三世代並び釣糸鯊日和
宵闇へ船尾の灯火遠ざかる

岡田宣子

秋の雲天動説の速度かな
大仏の見つむる方をちちろ虫
茹で卵つるんと剥くる小六月

小林京子

摘み菜を半坪ほどの畑から
石榴の実空に向かひて大笑ひ
巫女の挿頭（かざし）に日の照りかへす秋祭

梅澤輝翠

推敲終へ瞼閉づればちちろ虫
サウンドに虫の声入る歎異抄
本堂の読経浄土へ菊日和

清水桂子

新居にも花木槿あり下駄の音
新涼の君の背ふはり朝の雲
秋簾もるるカラオケ「北の宿」

菅原真理

秋戦すべからく神幸唱ふ
棹させば舟唄を乗せ秋の川
飼主の愁ひ瞳に秋の猫

杉浦千祐

泳ぎ来てプールに浮かぶ月掬ふ
綺羅星のかけらでせうか稲の花
紅葉且つ散るモザイクのいろは坂

綿引まりこ

干蒲団首の筋まで喜びぬ
夕餉あと二百個の栗剥きにけり
背伸びして二つ三つの柿をもぐ

篠原さよ子

天高し飛行機雲が空を斬る
初物のもつてのほかを妻に乞ふ
移ろひし夏の名残の赤の花

飯田忠男

車窓から目が釘つけに山装ふ
子規記念野球場側歩く秋
秋深しセーラー服のピアニシモ

千坂平通

父母の恋しくもなる秋の暮
天高し我身小さくなりしこと
秋惜しむ柱暦をめくる朝

高原和子

風よぎるねこじやらしだけを揺らして
火の恋し囲炉裏の恋し夕べなり
村芝居おぶはれ泣いた児も喜寿に

寺内洋子

窓開けば金木犀に引き込まれ
冷まじや安達太良の水大海へ
訪ぬれば花野はすでに季すぎし

藤川比早子

リコーダー求め夜学のアンサンブル
天高し変形菌と生きる人
体育の日オリンピックの夢の跡

小駒さち子

甘やかに目覚め窓辺にキンモクセイ
「咲いたよ」と向う三軒キンモクセイ
街中がきらめき薫る金木犀

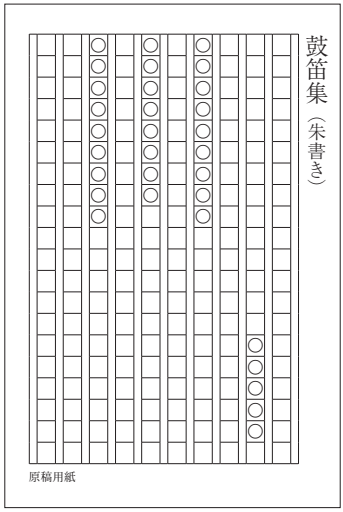
鳴海順子

金木犀匂ふ公園猫一匹
シンプルに己れを生きて秋麗ら
イーゼル立て己が旅へと秋麗ら

関谷多美子

鼓笛集の書き方

○俳句は四行目からお書き下さい。
○二百字詰原稿用紙をお使い下さい。



鼓笛集作品評

大村節代

長き夜の羊の数は億を超え　　持永喜夫

眠れない夜に、天井の節穴を数えて、懸命に眠ろうとしても眠れない。節穴の数はそんなにないからと、羊を数える。羊が一匹、羊が二匹……億万匹を数えてもまだ眠れない。

羊を数えるのには、諸説があるようだが、億万匹となると、これはもう白髪三千丈の世界といえよう。羊も疲れたであろうから、睡眠をあきらめて、俳句を作ったり、歌でも歌ったら如何。

着陸の待機の旋回秋の空　　岡田宣子

羽田空港へ離着陸する航路が変更になったとかで、都心のビルをかすめるように、航空機が飛んで行く。飛行機が間近に見えるので、最初は大人も子供も喜んで空を見上げたが、あまりにも低飛行に、ときにはひやりとした。そして、見なれれば、前ほど関心を示さなくなった。

秋の雲天動説の速度かな　　小林京子

何とも雄大で、楽しい句である。あえて堂々と天動説を持ち出した所が、何とも愉快。天動説は果して如何なる速度で失速したのか。ひょっとして今以て、地球の何処かで、信じて止まない輩がいるのでは……。

鼓笛集巻頭（十月号）

私の好きな一句（自句自解）　　菅原卓郎

有り体に言へば平凡去年今年

定年後はどの様に過ごしますかと、よく聞かれましたが、ただ穏やかに暮らしたいと応えておりました。一年間恙なく暮らせればとの思いを込めて詠んだ句です。

水明通信

言い習わし

寺内洋子

何十年振りかでＮＨＫ朝の連続ＴＶ小説を見ています。笠置シズ子に興味があったので。

田舎の友人は番組の初めに出てくる骨皮筋子の動画が終わってからテレビの前に座ると言い、その理由を聞いて笑ってしまいました。

小姑が５人もいる所に嫁に行った彼女。その５人が５人ともあの動画のような体型なんだそうです。反対に彼女はふっくらさん。学校時代はそれほどもなかったのですが、加齢と共にだんだんと。しかし筋エ門のご主人にはそれが好もしかったようです（夏でも長袖長ズボン姿でした）。そんなあれこれを思いながら毎朝テレビの前に座っています。

彼女の小姑はみんないわゆるバックシャンだとか。それを私の田舎では「後ろびっくり前びっくり」と言います。バックシャンという言葉も遙か昔に死語になっていますが。

ラジオ体操体験記

染谷風子

七月二三日から一週間、地域のラジオ体操に参加した。元々は夏休みの子供達が対象であったが今年より高齢者も参加する様自治会の要望があり、私も妻の言い付けで参加した。夫婦連れの高齢者の参加も多かった。大変羨ましい限りである。

出席者はやはり小学生が中心だ。また両親に付き添われた幼児も少なくない。私の地域にこんなにも子供がいるのかと驚き、一茶の「雪とけて村一ぱいの子供かな」の句を思い起した。

私はラジオ体操を六十年間やっていない。最初は前の人を真似て手足を動かした。第一・第二を真面目に連続してやると息切れがした。やはり年か。しかし気分は爽快だ。

今の日本の最大の問題は少子高齢化だ。けれど若い人が自分の夢を将来に託せる社会であれば日本の未来は盤石だ。子供達を見ながらそんな事を考えた夏の朝であった。

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。　　主宰　山本鬼之介

［指導者］ 網野月を
［作　品］ ５句　［受講料］1,000円
［方　法］ ①用紙自由　②住所･氏名･電話番号を明記　③84円切手を同封　④返信用封筒は不要　⑤締切なしで随時受付
［送付先］ 網野月を　　電話 080－7580－0208
〒338-0012　さいたま市中央区大戸 1-31-2

網野月を　選

山紫集

濁音を付けて手渡す新豆腐　野田静香

掌に刃当たり優し新豆腐　町野広子

跡継ぎの大き掌新豆腐　松井由紀子

新築の隣家に灯り新豆腐　鈴木藻好

新豆腐するり舞妓のおちょぼ口　下川光子

おいでやすでけていますわ新豆腐　西幅公子

病室の母にひと匙新豆腐　保坂翔太

いさかひの明けたる朝に新豆腐　山中いちい

諍ひを避け黙黙と新豆腐　正木萬蝶

兄妹の小さき自転車新豆腐　吉川拓真

――以上特選

新豆腐ふはりと掬ふ産湯の子　綿引まりこ

吾が寿命延ばして賜れ新豆腐　青木鶴城

老々の卓の主役や新豆腐　秋谷風舎

「笹の雪」根岸の里の新豆腐　新　暦文

匂ひ立つ会津訛りや新豆腐　阿部幸代

百選の水が育む新豆腐　荒井倶子

水桶に三丁残る新豆腐　飯田忠男

杉玉の少し黄ばみて新豆腐　池田珪子
軽トラに水したたらせ新豆腐　池田雅夫
うるさいな塩だ醤油だ新豆腐　石田慶子
年内に閉づといふ店新豆腐　石川理恵
新豆腐を水割つて売るたなごころ　井上燈女
旅の宿心慰む新豆腐　井上玲子
喉越にふる里匂ふ新豆腐　上戸千津子
新豆腐少年の髭むくと伸び　内田恵子
店先で醤油はらりと新豆腐　梅澤輝翠
厳かに豆腐会席新豆腐　梅澤佐江
賽の目に方の花咲く新豆腐　大場順子
新豆腐今日の店主の太鼓判　岡田宣子

石臼や自家製法の新豆腐　加藤でん治
待つてました柔な男の新豆腐　川島夕峰
会席料理舌のよろこぶ新豆腐　熊倉千重子
島原の真つ四角錐新豆腐　河野はるみ
離乳食児のよろこびて新豆腐　後記朝香
新豆腐畦から育ち姿変へ　小駒さち子
ペアグラス傾ける日の新豆腐　越田栄子
新豆腐今日は元気なラッパの音　後藤綾子
父と子と似ても似つかぬ新豆腐　小林京子
脱サラの婿が前掛け新豆腐　近藤徹平
食戻り夫の笑顔や新豆腐　榊原聰子
新豆腐薬味たつぷり検査無事　佐々木史女

百選の水が自慢の新豆腐　笹本啓子
新豆腐薬味は要らぬ箸二膳　篠﨑紀子
朝明けや冷水沈む新豆腐　篠原さよ子
婆が口出す手出す家伝の新豆腐　渋谷きいち
紀の国の水清らかや新豆腐　嶋田洋子
約束の旅は青梅の新豆腐　清水桂子
掛茶屋の碗に真白な新豆腐　霜多光代
おちうどの裔の矜恃や新豆腐　菅原卓郎
居酒屋の取りあへず生新豆腐　菅原真理
肝はにがりか固まりそこね新豆腐　杉浦千祐
霊山下り宿坊の新豆腐　鈴木玲子
新豆腐ずしり古店水槽に　関谷多美子

新豆腐豆の出自は問ふまいぞ　瀬戸雄二郎
哲学の道の水音新豆腐　染谷風子
喇叭の音門に迎ふる新豆腐　反町　修
水汲みは男の日課新豆腐　髙橋満耶子
新豆腐語らひの輪の真ん中に　高島寛治
晩酌に好みの薬味新豆腐　武田重子
荒縄で提げて買ひ行く新豆腐　田中章嘉
新豆腐切りて始まる夕餉かな　飛永　鼓
新豆腐今朝の湯けむり威勢良く　鳴海順子
褒めことばもらひつすくふ新豆腐　南條きわゑ
村あげて大豆の畑新豆腐　野口和子
引き売りのラッパで目覚め新豆腐　野村美子

お待たせと主役になりし新豆腐　畑宮栄子　チヤルメラにチヨイト顔出す新豆腐　持永喜夫

雲水の静静はこぶ新豆腐　原田秀子　新豆腐娘婿との縄のれん　元田亮一

てのひらの存在感の新豆腐　樋口元美　常連は隅に酒酌む新豆腐　本橋稀香

美(うま)し水麗しき人新豆腐　日髙道を　新豆腐くずす角より香りをり　森　和子

深山の座禅の僧へ新豆腐　檜鼻ことは　新豆腐所望す京の旅の膳　森川義子

二合半のはずがつひつひ新豆腐　福田千春　朝餉には新豆腐出る京の宿　森下美智枝

菜切り手に鼻唄交り新豆腐　曲淵徹雄　継がぬとは言へず豆選る新豆腐　森美枝子

瓜割の水透き通る新豆腐　松宮保人　新豆腐舌なめらかに宴はづむ　山岸久美子

雨ふりの里重し重しと新豆腐　松本光子　父母の丸き塗箸新豆腐　山下ユリ子

ふらり寄るいつもの店の新豆腐　丸屋詠子　居酒屋のおすすめの品新豆腐　湯浅　和

町内に残る二店(ふただな)新豆腐　丸山マスミ　名水の里の一庵新豆腐　横山君夫

東雲や筆字清楚に「新豆腐」　宮崎チアキ　新豆腐下げて薬味の算段や　横山礼子

山紫集作品評

網野月を

濁音を付けて手渡す新豆腐　野田静香

はて「濁音」は何であろうか。「新豆腐（しんどうふ）」の濁音か、または「ありがとうございます」の濁音なのか、想像してしまう。それとも「へい、いらっしゃい」の声がだみ声であったのか分からないのだが、なんとも下町に今でも残る庶民の豆腐屋に思える。「新豆腐（しんとうふ）」だからこそ成り立つ句であって、「新豆腐」の澄んだ味わいや真っ白い見た目との対比で「濁音」が活きているのだ。「がんもどき」も一緒に購ったということなのかも知れない。

掌に刃当たり優し新豆腐　町野広子

通常、「刃当たり」は一年中同様で、「新豆腐」の手触りに変化があると感じるのが常であるが、作者はその「新豆腐」を通ってきた「刃」に常には無い新味を感じたのである。コペルニクス的転換ならぬ広子さん的転換である。加えて「優し」とまで言っている。ということは、自分自身が「新豆腐」を「優し」く掌に載せて切っている、ということに他ならない。「新豆腐」に対する作者の心の在り方を叙している句なのである。

跡継ぎの大き掌新豆腐　松井由紀子

頼もしい限りの「掌」ではないか。その「大き掌」に載せられて新豆腐が水桶から、今はステンレス製であろうが、桶から掬い出されるのである。先代にとっても頼もしい限りであり、その店の御贔屓筋にも頼もしい限りなのである。省略のきいた句で、すっきりしている分、「新豆腐」の本意・本情にぴったりである。

新築の隣家に灯り新豆腐　鈴木藻好

台所の出窓越しに「新築の隣家の灯り」が文字通り垣間見えたのであろう。「初めまして」の方が引っ越して来たのであろうか。それとも旧来のご近所さんが「新築」されたのであろうか。「はじめまして」の方なら、「新豆腐」の季語は百パーセント清新さを表現しているように読めるのだが、旧来のご近所さんなら、自分の家だって豆腐くらいは「新豆腐」だぞ、と気持ちを取り直しているようにも読める。季語「新豆腐」の庶民的な雰囲気が平生の秋の夕方の生活の一コマを活写している。

新豆腐するり舞妓のおちよぼ口　下川光子

「舞妓」が、客前でお膳をすることがあるのであろうか。それとも作者は何処ぞでこの景を見かけたのかも知れない。「舞妓」は紅をことさらに小さめに指して、「おちょぼ口」に見せるのであろうが、それにしても白塗りの「舞妓」が、「新豆腐」を食す光景は、俳諧味があり過ぎると言うほどのものである。「するり」の擬態語が「舞妓」の幼さを表出しているように感じられる。

おいでやすでけていますわ新豆腐　西幅公子

上五中七は会話文である。いつもの時間帯よりも少々早めにお店を訪ねたのであろうか。筆者は詳しくないが、この会話文は京都弁に拠るのであろう。京都弁の将にはんなりとした言い回しが「新豆腐」にぴったりで、新物を愛でるという庶民の楽しみを体現している。

病室の母にひと匙新豆腐　保坂翔太

そのまま読めば作者ご自身のことであろう。知り合いの母子を見つめている作者の視線かも知れない。俗にいう母もの俳句だが、季語「新豆腐」に込めようとした情感が句全体に横溢するもので、万人に理解される句であろうと思う。

いさかひの明けたる朝に新豆腐　山中いちい

「いさかひ」の重量感と「新豆腐」の重量感を比している句であろうか。この句の場合は、つまり今回の「いさかひ」については、些か「新豆腐」に分があったということである。「明けたる」が「いさかひ」の解消した事柄と「朝」を導き出している。とにかく、それほど大きな「いさかひ」ではないのである。

諍ひを避け黙黙と新豆腐　正木萬蝶

こちらの句の「諍ひ」の重量感は、「新豆腐」の重量感に勝るとも劣らないほどの存在感を持っている。「黙黙と」食べているところからして、「新豆腐」を愛でつつ、その味わいを楽しむ心のゆとりを失くしている、とも解せる。主語の人物の、「新豆腐」を味わいきれないでいるもどかしさをも感じ取れる。

一方で「新豆腐」を食べることへ逃げ込めた主人公の安堵感を表現しているとも解せるだろう。同じく「黙黙と」がその解釈を成立させる。「新豆腐」の小宇宙の中にあって主人公は、小さな平安を得ているという景としてである。

兄妹の小さき自転車新豆腐　吉川拓真

お使いに行った兄の背を妹は見ながら必死に自転車を漕いで追い付こうとしている、という景であろうか。それとも母親の買い物についてきた、兄妹であろうか。兄妹と彼らが漕ぐ自転車の背景にあるシチュエーションは読者の想像に任されている。読者に任された句の背後の景がどれほど大きくとも句の芯にある「兄妹の小さき自転車」と「新豆腐」の関係性から醸し出される抒情性は如何とも消し難い。

第７回

水明塾を終えて

青木鶴城

穏やかに晴れ渡った十月三十日（月）に第七回水明塾が浦和コミュニティーセンターにて開催されました。

今年も第一部・第二部の構成で、午前の第一部は網野月を講師による全句講評講座を、午後の第二部には俳人の堀田季何氏の講演を頂きました。

第一部の全句講評講座には、十九名より二句ずつ全三十八句が投句され、網野月を講師のもと山本主宰及び曲淵徹雄、保坂翔太、河野はるみ、日髙道を、青木鶴城の五名の季音同人のパネリストが、すべての句について合評を行いました。

中には、網野講師とパネリストとの鑑賞や評価に意見の違いもあり、大変興味深く中身の濃い講評が展開され、講座の最後に皆川更穂氏より、受講者を代表して網野講師への謝辞と御礼が手渡され、お開きとなりました。各句の講評の詳細については、別紙の網野講師の報告資料をご参照下さい。

午後からの第二部は、堀田季何氏を迎えて「俳句と韻律」のテーマ講演が実施されました。講師の堀田季何氏は俳句、短歌、翻訳、評論のジャンルで広く活躍され、俳句においては俳句結社「楽園」の主宰であり、句集「人類の午後」で、二〇二一年度芸術選奨文部科学大臣新人賞、第七七回現代俳句協会賞を受賞されるなど、まさに今が旬の俳人。

「音なの、俳句」のタイトルは「大人の俳句」でもあると笑いを取って講演が始まり、左記の内容で進められました。

一、二つの視点

（あ）詩なんです

①導入

㈠、詩って？広義の「詩」

㈡、詩って？狭義の「詩」

②詩なんです＝音なんです

㈠、中国（詩経～唐詩～その後）

㈡、西洋（古代ギリシャ～ソネット～現代）

③詩なんです＝音なんです

㈠、俳句が誕生するまで

㈡、俳句の流れ
㈢、音の軽視へ
（い）技を極める
二、定型は十七音なのか
（あ）十七音と五七五とその他
（い）音歩説
三、脳で響かせる
（あ）脳で響かせる
（い）オノマトペ：擬声語、擬音語、擬態語
（う）押韻：音通
（え）押韻：参考句
四、意と音の適切な関係
（あ）意と音を合わせる

俳句は十七音の詩、ならば詩とは何か。江戸時代までは詩＝漢詩であった。その後西洋文学が日本に入ってきて、翻訳の時に全てを詩と訳したことで「詩」が混乱した。また外国の詩や日本の歌が「詩歌」で括られたことで日本では「詩」が判然としなくなってしまった。

俳句の誕生は和歌からと言われるが、古事記には既に五七五の歌が存在する。同様に万葉集や古今集にも五七五の歌が存在する。和歌が連歌の形をとりその発句が俳句となって行った。

詩の韻律は俳句の韻律に通じ、漢詩における韻と朗読の時の音韻、同様に海外の詩の韻文や朗読時の音韻は俳句の参考となる。

句には様々な要素があり、一句一句それらの内容とバランスを決めるのが俳句の「技術」で、各要素の技巧だけではない。俳句の要素には、ひらがな、カタカナ、漢字の表記の要素と発音の要素がある。

定型の十七音も読みのリズムで変化するし、定型感は俳人によっても違うものである。作者のリズム感と読者のリズム感も当然違いがある。

オノマトペの有効な活用、韻を踏み音通を意識し、句意と音を合わせる言葉を選択することが「俳句の技」を極める事へ繋がる。

大まかにこのような内容でした。九十分間の講演の予定が講師の熱が入り、何と二時間を超えるものでした。幾つかの質疑応答の後、受賞作の「人類の午後」の販売サイン会で無事終了となりました。

講演の内容については、堀田季何氏の文面が後日本誌に掲載予定ですのでお楽しみに。

水明塾・全句講評講座

網野月を

おととし去年に引き続き水明塾では全句講評講座を開くことが出来ました。十九名の参加者、三十八句の応募があり、良句が揃いました。全体的に添削句はありません。従って講評の主眼は、どうしたらより表現に広がりや深みが出るのかということに集中できました。または、表現が複雑に過ぎるようなので、より直截的な表現にしてすっきりさせるのはどうかという提案になりました。具体的には、切れは切れ字に止まらないこと、座五の助詞「を」「に」「の」などの使用方法について、「かな」を使用する場合の工夫、動詞の平仮名書きのこと、等々になりました。

千枚の青棚田燃ゆ曼殊沙華

千枚田の畝の斜面に「曼殊沙華」が群れ咲いている、という景と解釈しました。が、文法的には「青棚田」が「燃ゆ」ということになりますね。「曼殊沙華」が咲き誇っているのならば、燃ゆる曼殊沙華となりますね。字余りではありますが。また、青田と「曼殊沙華」は季重なりです。加えて別季です。季重なりは必ずしも悪いわけではありませんが、別季の場合は問題があるかと思います。青田の間に棚を入れても季語外にするという訳にはいかないかと思います。

「燃ゆ」という措辞は使い古されているように思います。特に赤い花もしくは紅葉の場合は既視感があります。この句では青棚田が燃ゆという句になりますね。

また「千枚」と「棚田」に重複感がありますね。この部分も整理した方が良いように思います。

名月や幸こそ人の生きる意味

「名月」を見上げて幸福感に浸っている、と解釈しました。「幸こそ人の生きる意味」は幾分ナマな表現でしょうか。「幸」もしくは「人の生きる意味」のどちらかを具象にしたいところです。「名月や人であること思ひゐる」くらいでしょうか。

母の句を取り出して詠む秋彼岸

お母様の句集もしくは句帳を読んでいる、と解しました。とすれば「読む」でしょうか？お母様について句を詠むならば、取り出してが矛盾してますね。

一族の血の濃くなりぬ蘭の青

新種の「蘭」を作り出すために、「濃くなりぬ」、ということになるのでしょうか。ということは、上五中七の句意と座五の季語の取り合わせと解しました。句中の情報だけでは、読者が具体的な内容にまで解釈を及ぼすことが難しいかも知れません。

柿をくへくへーと群るる鴉かな

なかなか面白い句だと思います。鴉は、ガーの音からの形声の文字です。「くへ」ではありませんが。烏は見た目の象形の文字です。漢字の選択を工夫されると良いでしょう。

啄木も尾崎豊も十五の夜

啄木と尾崎豊を並べたのは慧眼ですね。こういう思い切った句は、別のチャレンジを加味しない方が良いでしょう。チャレンジしている部分を活かすためにそれ以外の部分は定型通りにした方が良いのです。有季定型なら十五の月でしょうか。

山の宿朝餉の刻に霧晴るる

朝餉をとりながら、霧の動きを見ているのでしょうね。座五の「晴るる」は「霽るる」が良いでしょうか。座五は連体形ですから、その後に「朝」が省略されていて、その分余韻を残しているようです。「刻に」省略する可能性がありますね。「山宿の朝の食事や狭霧霽る」もっと良い推敲句が得られると思います。

姿なき金木犀の香に酔ふ夜

どこからともなく匂い来る「金木犀」にハッとすることがありますね。姿なきは苦労の跡が見えますがやはり説明的要素が見え隠れしているかも知れませんね。類句を避けたいです。「歩を緩め金木犀の香に酔ふ夜」

柿の実や二股竿の先の先

◇その昔は枝咲に実った柿は、二股竿で枝を折って収穫していましたね。先に枝があってその先に柿が実っている、ということですね。先の先がどの位効果があるのかです。「柿の実や二股竿の先の空」の可能性もあります。パネラーの皆様のご意見も様々だったかと思います。

薬師寺の暗き御堂や虫の声

立派な句です。暗きということは昼間なのでしょうね。つまり虫の声は昼の虫なのでしょう。「寺」と「昼の虫」の取合せはベストマッチです。それだけに既視感もあります。推敲の可能性があるということです。「薬師寺の暗き御堂やちちろ虫」

古き地に極彩色の道後かな

道後温泉の景と解釈しました。座五の切れ字「かな」止めは、上五中七を凝縮する必要があります。「万葉(上代・かみつよ・天平)の地に極色(ごくしき)の道後かな」「万葉の地に濃彩の道後かな」様々に推敲が出来る句材かと思います。

月の色松籟深くつつみゐる

座五の平仮名表記に含みがありますね。三橋敏雄風ですね。

◇視覚(月の色)が聴覚(松籟)を包んでいる、という構成になるかと思います。

さきたまの古墳の上の鰯雲

このままで良いかと思います。全てを額縁に入れて描写すると掲句の様になりますね。そこに発見があると「さきたまの古墳の上に鰯雲」になるでしょう。掲句のように「の」は徐々に範囲を狭めてゆくのが理想的です。三つ重なっても苦しくありませんが、他の工夫も模索する余地があります。「さきたまや古墳の上の鰯雲」「さきたまの古墳に架かる鰯雲」

墜つる儘どでかく見ゆる秋没日

このままで良いかと思います。「墜つまま(任)に」とする可能性もあります。「秋没日」は視覚的に捉えていますから、「見ゆる」が要らないかも知れませんね。「墜つままに熱くどでかく秋没日」など様々に、工夫が出来るかと思います。

仕舞田へ農夫合掌秋の暮

このままで良いかと思います。「……へ」が良い効果をもたらしています。一方「秋の暮」の季語が大き過ぎるでしょうか、何でも包み込んでしまう季語ですから。加えて、「仕舞田」にも十分に季感がありますからね。「仕舞田へ農夫合掌秋の虹」

解体せらる誰ぞ住みしか秋高し

「解体せらる」は複合助詞で終止形と解しました。「秋高し解体せらる誰が住処」

ほの匂ふ金木犀や入日急

「金木犀」の匂いを感じながら、秋「入日」の釣瓶落としをも感じている、と解しました。「金木犀」は匂いを、秋の

入日は「急」を感じているもので、各々それだけを言っても十分に句として成立する素材です。「入日急」は敢えて言わなくとも読者に通じるか思います。「金木犀入日の影を目で追ひつ」

ほとばしる蛇口の水や黒葡萄

このママで良いかと思います。「黒葡萄蛇口の水のほとばしり」の可能性もありますが、原句の方が良いでしょう。

悪童に追はれ蝗の三段跳

このママで良いかと思います。中七の「追はれ」の後の切れが十二分に効いています。主宰の添削は「悪童に追はれ蝗の五段跳」でありました。

朝市や翁すすめる大栗よ

朝市の光景ですね。立派な栗だったのでしょう。「や」「よ」はどちらも切れ字（「よ」は呼びかけも）の役目を持っています。（『広辞苑』の「切れ字十八字」を参照してください。）「朝市の老夫すすめる大栗よ」

鵯数多夕暮庭にけたたまし

少々中七のリズムが悪いでしょうか。「けたたまし」で複数いることは分かるかと思います。複数なのか、単数なのかは日本語の欠点でもあり、特徴でもあります。巧く使いこなすことが肝要です。「鵯（ひよどり）や夕べの庭にけたたまし」

見ずや雨のごと黄葉(もみぢ)の落つるのを

「見ずや」は大胆な言い回しだと思います。筆者の能力では、添削の仕様がありません。お手上げです。「雨のごと黄葉の落つる様を見ず」「雨のごと落つる黄葉の様を見ず」でしょうか。パネラーのご意見に「見ずや」は反語的に解釈も出来るのではないか、という指摘もありました。

烏瓜仮の宿りの目印の

真っ赤な「烏瓜」の実を「目印」に宿の軒下にでも吊るした、という意味に解釈しました。二番目と三番目の「の」は「に」の可能性もあります。「仮の宿掛けし目当ての烏瓜」の可能性もありますが、少々説明的ですね。

原石を見つけ出します星月夜

幻想的な句になっています。手元の妖しい明るさの中で、「原石」を探していると解しました。作者が「原石」のに込めた意味がいま一つ難解でした。情報が限られていて、想像で補って読みますから、大部分の解釈を読者に任せている句ということです。空間の指定があると近寄り易くなるかと思います。

禅林寺向い合せの桜桃忌

三鷹ですね。「向かい合せの」森鷗外の墓石を明示した方が良いでしょう。「桜桃忌」しか分かりませんからね。加えて「禅林寺にて」の「前書」「詞書」があっても良いかも知れません。「桜桃忌向ひ合わせの林太郎」

銭湯の通ひし頃や星月夜

こんな「星月夜」には、幼いころ銭湯に通ったことを思い出すなあ、と解釈しました。良く出来上がっている句です。「銭湯に通ひし頃や星月夜」とう方法もあります。

秋茜もう階は走れぬに

「」は紅かづらなのか、それとも「秋茜」が赤とんぼであるのか、ということでしょう。また「走れ」ないのは作者自身か、それとも蜻蛉なのかが明らかになります。筆者には難解でした。たぶん、赤とんぼ取りをして遊んだ少年少女の頃のようには階段を駆け上がれなくなっている、という意味だろうと解しましたが。「石段を駆け上る兄赤とんぼ」、兄かどうかは分かりませんが。

あるじ去り柿の実朱く残りけり

このママで良いと思います。無住家か、もしくは廃屋でしょうか。「あるじ」を漢字にして「主去り柿の実朱く残りけり」ということも出来ます。また、客観表現ではなく、「残しけり」として、「主去り柿の実朱く残しけり」と方法もありますね。

銀杏散る古式ゆかしき美術館

このママで良いかと思います。「銀杏散る古式ゆかしき宝物館」くらいでも良いでしょう。できれば中七の「古式ゆかしき」を推敲しても良いでしょう。「銀杏散る煉瓦造りの美術館」

湯の流れ時の流れて秋道後

「湯の流れ時の流れ」で作者が湯につかっている感じを演出しています。「湯」か「時」かどちらかを主役にする仕方を模索してみました。「湯の流れ時を流して道後秋」

仏塔の辺りにほやか三日の月

このママで良い句です。三日月の仄かな明るさに仏塔が浮かび上がっている感じです。決して照らし出されている感じではありません。

水族館出て深呼吸鰯雲

掲句の口語「出て（でて）」は水族館のあとの「から」が省略されている形です。文語口語同形の「出で（いで）」の方を薦めます。「水族館出で深呼吸鰯雲」

白帝や海の白さを包む天

良句です。秋の季感たっぷりですね。「海の白さ」をいうならば「白帝」でない方が効くのではないでしょうか。具象性を深めても良いかも知れません。「新松子海の白さを包む天」「浜萱草（ハマカンゾウ）海の白さを包む天」などです。パネラーからは、「白」のリフレインに似た表現が好ましいという鑑賞も出ていました。

飯田線秋灯のせて遠くなり

電車の灯りを「秋灯」というのは少々、無理かもしれません。「秋の灯」くらいなら許容できるかと思います。前書「飯田線に乗る」を添えて。「秋峡（あきかひ）を遠くなりけり電車の灯」でしょうか。主宰の添削は「秋の灯の遠くなりゆく飯田線」でした。

底紅やをんな勝気に戸主になり

「底紅（そこべに：木槿）」の傍題詠が良いですね。傍題（子季語）を上手く使いこなすことも、作句の技法では重要なことです。上五の「……や」と座五の「……なり」に多少の切れの重複感があります。「底紅やをんな勝気に戸主となる」「になる」「になり」の「に」は格助詞。「となり」「となる」の「と」も格助詞です。

娘来て秋刀魚三尾の夕餉かな

このママで良い句だと思います。俳句における接続助詞「……て」は問題になる場合が多いのですが、掲句の上五の「……て」は悪い「て」ではありません。

「今度」とは永久に来ぬ日や流れ星

しみじみしますね。年配になってからの一会は尊いです。ただ「来ぬ日」までいうと寂しさの直截的な表現になっているようにも思います。「「今度」とは定めぬ心流れ星」くらいにしても言いたいことは伝えられるかもしれません。

凶作田立ち尽くしたる老農夫

「凶作田」の作例には大野林火、飯田龍太があり、西東三鬼は「凶作の刈田」の表現を、石塚友二は「不作田」の表現を使用しています。「凶作田刈りたる後の老農夫」くらいでも良いでしょうか。

今回は主宰をはじめ六名のパネラーの皆様とご一緒に講評講座をすることが出来ました。筆者自身大変に勉強になりました。有難うございます。

水明例会

第一例会（浦和）

境　延昭
茂木和子　報

剥落の幹の古色や居待月　マスミ
割稽古の袱紗捌きや秋闌くる　舎人
出稽古の琴の音ゆらぐ十三夜　千祐
稔り田や田んぼアートの鶴よ飛べ　順子
古利に消えしだらりの帯や初紅葉　節代
古民家の上がり框に秋の蝶　亮一
西の日の入りて秋の田静まりぬ　京子

――以上特選

秋の田やラップ包みの塩にぎり　節代
秋の田の光と翳り雲流る　稀香
古城の語る栄枯盛衰秋の声　チアキ
古書街の秋灯ともす喫茶店　亮一
古刹への磴百段にこぼれ萩　京子
秋の田を見下ろす丘に父祖の墓　延昭
古女房にも誘ふ友ある良夜かな　喜恵
古狸まづは試しと新酒酌む　卓郎
無人駅囲む秋の田照り映ゆる　徹平
稔田の匂ひまとひて離郷せり　由紀子
古利根を溯上し西方曼珠沙華　舎人
秋の田を左右に縫ひて利根悠々　マスミ
税対策の秋田雀の大食堂　千祐
古民家の軒に緞帳柿簾　順子
稔り田にひとつ安堵の農夫かな　拓真
おほどかな秋の田暮るるを見てをりぬ　和子

第二例会（東京）

五明　昇
曲淵徹雄　報

どなたかに分けてあげたき長夜かな　峰雄
一言を悔いて寝付けぬ夜長かな　〃
色鳥や人も獣も争へど　いちい
墨絵なる兼六園に色鳥来　〃
色鳥の声もいろいろ無人駅　敏江
嫁ぎ先ドイツとなりしUNIVERSE　士史
サルビアの群れなす色の孤独めく　竺仙
吾にある刻は幾か程秋夕焼　みどり
連綿と一日を綴る夜長かな　鶴城

――以上特選

腰かがめ狙ひし被写体尉鶲　りこ
何処より来ては去り行く色鳥の　士史
夜長には祈ることなど多かりき　いちい
色鳥の朝の会話の忙しなく　峰雄
ふと寝覚め隣の部屋は夜長の灯　敏江
十七字捨てよ捨てよの秋思かな　竺仙
昼灯す震災慰霊堂色鳥来　みどり
長き夜やもう一息の最終章　鶴城

第三例会（東京）

五明　昇
曲淵徹雄　報

秋耕やひねもす鳶の笛の中　順子
幸福は活けて供へて今日の月　〃
道の辺に触れてやりたき水引草　徹雄

踏み入りてはや蘆原の色となり　徹雄
逢ひたき日西方に吹くひよんの笛　康世
産土の神を引き連れ秋起し　萬蝶
秋耕に時報の届く蔵の町　昇〃
秋耕に読点を打つ鳶の笛

——以上特選

万年筆の文字やはらかに涼新た　康世
ベッドタウン俄農夫が秋耕す　千祐
若妻の秋耕の土馥郁と　順子
二番穂を巻き込む音や秋起し　星歩
新米のきらきらとしてお食ひ初め　萬蝶
渇筆の加減ゆかしく秋澄めり　理恵
別嬪の案山子に寸時足を止め　雅夫
秋起し藁の竜神口を開く　徹雄
何時となく似た者夫婦とろろ汁　昇

第四例会（浦和）

石井喜恵
境延昭報

穴まどひ墓所は疾うに手配済み　延昭
大刈田風を頼りに熱気球　〃
百万石の刈田を分くる新幹線　昇〃
失せてなほ胸に尾を曳く穴惑
刈田道風の小僧と後先に　マスミ
刈田中落日に佇つカメラマン　喜恵
穴まどひ頬に手を置くロダンの像　〃

——以上特選

田圃アート残し暮れ行く刈田かな　暦文
遠き日のすぐそこにある刈田　昇
行き暮れて野道に出合ふ穴惑　玲子
刈田なる三角ベース夕映えて　でん治
里遠く刈田の夜のひろきこと　由紀子
野花摘む親子の笑顔刈田道　翔太
刈田道旗立つ移動販売車　延昭
夕映えの刈田に鷺の散らばりぬ　光子
刈田道夕陽の中を下校生　修
見つからぬどこでもドア穴惑　恵子
刈田道「夕焼け小焼け」の声空へ　マスミ
大刈田長き影ひくローカル線　寛治

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

お伽噺幾つも浮かぶ秋の川　はるみ
巻雲をのせて流るる秋の川　玲子
ふるさとの変らぬ駅舎柿の秋　水尾
落日の山嶺映る秋の川　宣子
東京都根岸二丁目柿の秋　佐江
白壁を映して清し秋の川　〃
底砂に日の揺らめきや秋の川　〃

——以上特選

艇庫より若き競ひや秋の川　義子
あどけなく指先だけを秋の川　千祐
樽柿を戸板に盛つて夜の市　美佐尾
色づきを選び購ふ柿二つ　宣子
堂堂と「種なし柿」と店先に　はるみ
梵鐘に寄進の名あり木守柿　水尾
鐘わたる嵯峨野路ゆけば万の柿　玲子
子等の声途絶えし里の柿明り　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子報

伊賀甲賀黒装束の案山子かな　佐江
ピエタの如く膝に抱けり捨案山子　〃
産土を出でし子の衣の案山子かな　千祐
立つて寝る案山子は明日も早いから　千春
風を読む案山子もあらむ千枚田　ひろこ
頂きの類人猿の秋思の背　稀香
上州の風を味方に案山子立つ　はるみ
膝を折り祈りの形に捨案山子　萬蝶

——以上特選

やれやれと笠の緒を解く案山子翁　マスミ
蝗採昆虫好きは類を呼び　千春
足元を数多の種類草もみぢ　はるみ
零余子飯あなた無類のお人好し　佐江
打上げは類は友呼ぶごと新酒　慶子
空仰ぎ何を思案の案山子かな　京子
正体は久延毘古といふ案山子かな　星歩
黄金なす棚田の案山子行儀よし　鶴城
娘らをひらがなの目で追ふ案山子　ひろこ
キリストは嘆き案山子は傾けり　稀香
酒米に酔ふたか案山子赤ら顔　千祐
八百万の神の抜け殻捨案山子　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

嵯峨野路に鐘の音流る去来の忌　千津子
独り居や風騒ぐ夜は火が恋し　〃
泣きつ面に食らふげんこつ新松子　満耶子
火恋し海溝深く御紋章　ゆら女
天高し人文字みごとに完成す　道子
羨道のほのかな明かり秋の声　玲子
渡海僧発たせたる浜鰯雲　和子
鈴虫と深き夜の闇共にする　早苗

――以上特選

墨跡は深く心に雁わたし　ゆら女
残業の娘の愚痴や火恋し　洋子
月今宵水面にあはき淡路の灯　玲子
十三夜一途な愛の半世紀　早苗
刈機では稲刈り唄も聞こへ来ず　千津子
小座布団と待つ無人駅火恋し　和子
火恋し終着駅にひとり下り　道子
一つ家の先客は猫梅擬き　千枝子
割烹の店に馴染みし藤袴　千世子
思考力ふはりふはりと酔芙蓉　満耶子
火恋し夜の静寂に我一人　きわゑ
憂き事を忘れ去らんと月仰ぐ　嶋田洋子

昔話あれこれ33

『大鏡』
大臣列伝

基経

（＊この後『大鏡』はさり気なく陽成天皇の譲位の会議の記述となるが、『古事談』、『三代実録』などには、陽成天皇の奇矯な振る舞いや、宮中で殺人事件が起き、陽成天皇がこれに関与していたという風聞などの記述がある。陽成天皇は九歳で即位し十七歳で譲位したが、長命で、上皇歴65年は歴代一位。）

源融の発言

（陽成天皇は御子がなかったので）次の天皇を定める会議が開かれた。嵯峨天皇の皇子で、源姓を賜り左大臣となっていた源融（河原院）は、帝位に即くべく強い願望を持っていたので、

「議論にも及ぶまい。近い皇胤を探すなら、私がここにおるわ。」と申し出たところ、基経は

「皇胤と言っても、源姓を賜って一旦臣下として仕えた方が、帝位に即いたという前例があるでしょうか。」と言って融の発言を聞き入れず基経の裁定により、時康親王が五十五歳で即位し、光孝天皇と称した。

（＊時康親王は質素を旨とし、泰然自若たる暮らしぶりで、毅然とした風格があった。が政治には無関心であったことは基経が政務を独占するのに好都合であった。関白の実質的な関与をここに認めることができる。

『歴代天皇総覧』より）

時平

基経長男

醍醐天皇がまだ十五歳であった時、左右の大臣に政務を委ねた。

左大臣は時平で二十八、九歳。

右大臣は菅原道真で五十七、八歳。

右大臣は、漢詩文の学識や、学問芸能の知識にも優れており、心配りも優れていた。

（つづく　丸山マスミ）

各地句会

円卓の会（浦和）

露寒し今朝の厨の和包丁　輝翠
今日訪へば明日母死ぬ木守柿　京子
生き物に与ふる知恵や毒茸　翔太
毒茸厚化粧して誘ひけり　修
露寒や訃報メールは家族葬　亮一
煩悩の消えてゆくなり添水鳴る　静香
毒茸の殺意は色に隠しをり　道を
露寒の日本橋川舟の錆　拓真
月耿耿鳥獣戯画の躍り出づ　月を
人生の生の本意や穴まどひ　鶴城

若鮎句会（浦和）

一人座す夜寒の居間の広さかな　芳春
何気無い友の一言夜寒かな　秀子
夜を寒みポスト食み出るAmazon荷　拓真
語らひて呑み込む余生夜寒かな　香音子
気は澄みて風は野にあり吾亦紅　道郎
風往なし清く野に坐す吾亦紅　人美
秋天や気ままに泳ぐ作業服　貴
見舞ひては一人の帰路の夜寒かな　稀香
人力車膝掛けふはり夜寒かな　紀子
吾亦紅あちこち向いて自己主張　順子
白き穂の礼文で会ひし吾亦紅　真
モビールの仄かな揺れや吾亦紅　月を
「ただいま」の作り笑顔や寝待月　鶴城
吾亦紅真直ぐ生きろと母の声　喜夫

柿の木塾（浦和）

小走りで何を急ぐや石叩　章嘉
断崖の真鶴岬野菊濃し　水尾
菊人形差替へてまた若返り　節代
渓音を子守唄とし石叩　かつ子
野路菊や足摺を行く笠の列　昇
菊日和卒都婆小町を舞ふ白寿　恵子
せせらぎの音に合はすか石たたき　和葉
庭菊の莟ほぐるる日中かな　和子

たかんな俳句会（川口）

天高く人生の解なほ深し　謙一
風吹けば違ふ色なり草紅葉　のり子
男体山のうしろ姿や草紅葉　福美
ライト越え球の逃げ込む草紅葉　小麦
菊月や母の形見の解き衣　義子
松手入れ小鉤のひとつ外れをり　鶴城
分校は今年限りや草紅葉　水尾
山門の龍を遊ばせ松手入　静香

小梅の会（浦和）

今のまま今のままでと秋の風　恵子
秋風や八百屋魚屋乾物屋　隆文
秋風や墨工場の庭清し　進
今治へ弾丸道路秋の海　隆然
茶を啜る高座の仕草秋の夜　道を

俳句の手ほどき（岩槻）

龍田姫卑弥呼の国はいまも謎　延昭
吐息さへ山昂らせ龍田姫　佐江
薄日さす登りの径を竜田姫　水尾
思ひきり神鈴振るや龍田姫　義子
日野富子北条政子龍田姫　徹平
鏡なす湖を彩る龍田姫　翔太
杣道ですれ違うたは龍田姫　忠男
舞ひ降りて里の社へ龍田姫　幸代
竜田姫いろは坂まで遊びくる　桂子
秋晴やインフルエンザ虚ろな日　美子
竜田姫とりどりの色を野に山に　久美子
枝に結ふ「吉」の御籤や龍田姫　卓郎
狼の背に乗り来る竜田姫　かつ子

ミモザの会（横浜）

露座仏の口元ゆるぶ菊日和　萬蝶
感謝こめ棺に別れの白菊を　詠子
慶びも哀しみの日も菊の花　栄子
祖母白寿菊の香みつる祝ひ席　美千子
菊の香や母の手入れし小さき庭　亜弥子
置配のごと小菊どつさり勝手口　慶子
名台詞聞こえてくるよ菊人形　由美子
墓前に父の好きな白菊七回忌　玲子
路地裏に小菊の鉢を守りて老ゆ　史代
息吸つて止めて肺腑に菊の香を　千春

神戸大池句会（神戸）

秋天や電話工事の声高に　玲子
秋雷に狭庭一瞬別世界　千津子
救急車出動多し地虫鳴く　早苗

皐月の会（浦和）

南無阿弥陀仏松葉に埋もれ小松茸　山菜
岨道へ松茸狩や深山晴　更穂
ダリの絵の筆のはこびや秋の虹　光代
土瓶蒸酒なみなみと馬上盃　珪子
松茸めし胸に馥郁たる香　順子
地芝居へ村人参加にぎにぎし　紀子
加賀蒔絵の文箱の光る美術展　静香
秋高しロケット競ふ吉田町　暦文
天高し米と石油の越後平野　美佐尾
松茸や能登に名人義理の父　きいち

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

秋鯖の旬のきはみをバッテラに　延昭
秋鯖や馴染みし店の角の席　美枝子
小三治の枕聞き入る夜長かな　健司
上棟の祝詞らうらう秋日和　倶子
桜もみぢ朝の静寂を掃きにけり　節子
竹の春イケメンの曳く人力車　昇

山茶花（浦和）

秋の田や気流捉へて鳶悠悠　マスミ
ひつそりと紫式部庭の隅　美江子
立山の水きらきらと早稲育つ　綾子

水明澪つくし句会（大阪）

ゑのころの穂だけに風のありにけり　洋子
碧眼に映しとられよ月皓皓　人美
名残惜しふるへる花弁秋の風　智恵子
立見して贔屓一席夜半の秋　ゆら女

新樹の会（浦和）

やや寒の渚に残る蹄跡　徹雄
能面の次なる仕草秋の夕　平通
やや寒し一枚羽織る日暮かな　修風子
人生は一次関数庭叩　清吉
やや寒や牛乳瓶の白き筋　道を
漸寒や大聖堂の屋根の反り　鶴城
毒茸や秀次の死になほ諸説

野ばらの会（浦和）

林檎むくくるりくるりと太き指　茂子
満天の星の深閑蚯蚓鳴く　栄子
バッハ聴く通奏低音蚯蚓鳴く　秀子
林檎手に救命講習申し込む　夏江
新品の化粧水沁む蚯蚓鳴く　みき子

蝌蚪の会（浦和）

青空の開会宣言運動会　元美
秋風や言の葉さがす散歩道　ひさの
露時雨日は遠山に足は野に　風舎
冬瓜ゴロリクロスワードの手が止まり　朝香
冬瓜や酸いも甘いも老夫婦　さち子
木に絡み冬瓜ひつそり育ちゆく　しるく
言ひ訳を呟きながら星月夜　礼子
違ふでしよ言葉のみ込み柿をむく　英子
秋じめり愚痴言ふ姉と言はぬ母　月を
冬瓜や白黒はつきりしない奴　鶴城
冬瓜を抱へシンクにどすんとす　宣子

和歌山水明句会（和歌山）

跳箱と跳べぬ子の影秋夕焼　和子
行きつけの画廊すつぽり蔦紅葉　道子
生家への一本道や柚子実る　千枝子
立ち姿店にとけこむ藤袴　千世子
風はらむ巫女の袴や実南天　満耶子
離れずに道案内か赤蜻蛉　きわゑ
ゆく秋の灯り恋しき薄暮かな　洋子
火恋し軋む棚田の水車かな　廸代

芙蓉句会（浦和）

細引に総身縛られ吊し柿　道子
粥を炊く隅でか細くちちろ鳴き　税子
茸がりぞ縄文人の目鼻借り　仁
心細き吾の先をゆく秋茜　美子

繭の会（浦和）

青空を載せて傾く田の案山子　律子
和らぎし妻の背の黙桔梗咲く　和子
紫に雨を染めにし花桔梗　寿夫
秋深し産湯であくび頻つつく　伸子
降りしきる雨に色ある桔梗かな　比早子
真つ直ぐに生きて桔梗の佇まひ　まりこ
案山子着る十七番のユニホーム　珪子
田の実熟れ睨みを効かす案山子かな　さよ子
紅さしてマネキン案山子田を守る　小麦
むらさきの桔梗の好きな母二人　夕峰
マンションが案山子の前に立つてゐた　風舎
米喰はぬ人に弓引く案山子かな　風子
ウエストのきゆつと締まつた藁案山子　月を
産声の響き渡るや秋の院　鶴城
王子と踊る如く案山子と踊る　京子

鶴川山百合句会（町田）

これこれと額叩いて新酒酌む　雄二郎
新米や俵に作る塩にぎり　月を
ふつくらと煮上がる母の新大豆　史代
手に馴染む若狭塗箸新豆腐　広子
跡継ぎができて気合ひの新豆腐　千春
一輛電車の我に手を振る案山子かな　萬蝶
寺三か所巡りしのちの走り蕎麦　理恵
今年米まづは究極塩むすび　美千子
グラウンドの白線太し秋の朝　玲子

若狭水明会（若狭）

狛犬の台座に赤飯村祭　郁子
夫婦して昔を偲ぶ良夜かな　八重子
コロナ経て戻る賑はひ村祭　登美江
露天商はいつもの親爺秋祭　保人
柏手の響く社や秋祭　ことは
移住者の山車引き歩く秋祭　祥子
無花果の婆も里も熟れゆきぬ　寛久
面かぶり踊るヒョットコ秋祭　白鷺
海神に御明し仄と浦祭　和風
カーテンは閉めず良夜をひとりじめ　初花

櫟の会（浦和）

葡萄狩り次の目的ワイナリー　文子
踏切を渡れぬ少女赤とんぼ　治子
葉陰よりこぼるる陽射し葡萄熟る　あつ子
葡萄吸ふ将来の夢語りつつ　朋子
捥ぐ捥がぬ魂胆試す葡萄かな　裕誌
二次会の女性全員マスカットパフェ　富子
沼畔の釣果を覗く赤とんぼ　千重子

珊瑚の会（浦和）

鬼の子に風のささやく子守歌　和葉
奥山の天狗の里や霧深し　かつ子
蓑虫揺れ眠気を誘ふ五時間目　喜恵
朝霧や木曽の筏の水馴れ棹　マスミ
連山の襞といふ襞霧湧けり　水尾
蓑虫の揺れも小粋な神楽坂　昇
蓑虫や宿命論をふと思ひ　恵子
忍び入るには恰好の霧の夜　史代
蓑虫や中天を行く一機あり　広子
霧の中ぼんやり浮かぶマリア像　和子
霧深し腰掛石につまづけり　節代

きざきサークル（浦和）

国生みかくや大擂鉢のとろろ汁　昇
女子寮の夕べ明るきとろろ汁　光子
相席の微かな訛りとろろ汁　健司
竹の春屋敷祠に朱の鳥居　倶子
竹の春山門飾る大草鞋　啓子
とろろ汁すり鉢しかと押さへる子　和
とろろ汁大擂鉢に母の影　和枝
竹の春参道に選る土鈴の音　和子

あゆみの会（浦和）

小半の米と炊き込む山の栗　倶子
鰯雲クリテリウムに人の垣　重子
秋の夜何にしようと料理本　山遊
それぞれに具材持ち寄り芋煮会　和
目秤で作る煮しめや秋深し　啓子
秋の暮レトロ喫茶のナポリタン　藻好

りんどう俳句会（浦和）

山小屋は戸口を鎖すや秋惜しむ　寛治
飴色に透きて干柿仕上りぬ　君夫
暑寒なき衣戸惑ふ秋惜しむ　弘夫
いちだんと活気づく村吊し柿　治子
菊活けて月下氷人迎へたり　風子
一人ゆく古都の低山秋惜しむ　徹雄
山風に揺るる干柿御師の家　翔太
背伸びして祖母のほまちの吊し柿　順子
風に揺る木々のささやき秋惜しむ　利子
安達太良の空へ色増す吊し柿　まり子
七言を唸る詩吟や秋惜しむ　卓郎

青葉の会（浦和）

秋暮し手団扇使ふ女学生　真理
五輪選手めざして秋の雨の中　美智枝
沢庵や皺も自慢の一つとし　啓子
秋澄むや雀水のむ手水鉢　公子
沢庵は水の上がりが勝負なり　洋子
足音が追ひ越して行く暮の秋　和子
白露や五百羅漢の福耳に　輝翠

雛の会（浦和）

表札はありし日のまま秋灯し　燈女
ラグビー戦終へて車座秋の風　チアキ
句読点なき母の手紙や水引草　喜恵
車長持庭に引き出す秋土用　輝翠
茶室へと続く飛石水引草　佐江

櫻蔭句会（浦和）

屋敷林雲棚引きて秋高し　多美子
飛行機雲の伸びゆく空や秋高し　久美子
秋高し大海原にとんび舞ふ　美智枝
歩荷行く尾瀬の木道天高し　公子
秩父路に熊よけのベル秋高し　真理
作業場の野菊にからむ鉋屑　由紀子
秋高し電線にゐる鳥の群れ　千恵
流鏑馬の蹄の音や天高し　茂子
剣岳登り詰めなほ秋高し　行雄
見つめあふ通りすがりの吾と野菊　幸代

芽吹句会（浦和）

無住寺の土塀にすがる蔦紅葉　修
木犀の散りゆく刻（とき）の速さかな　久美子
土手のあきつ詩になりたくてホバリング　ひろこ
天高し藤井聡太の土つかず　チアキ
肥沃なる土黒ぐろと大根蒔く　玲子
摩周湖の霧晴れぬつと古馴染　富子
言葉なく歩く二人よ霧の中　千重子
木犀の香に誘はれて床払ひ　道を

若楠句会（浦和）

秋風の古道を行けば我無心　真由美
妹はいつも聞き役螢草　直子
露草のその青を見よもののふよ　宏治
冬近し白寿の伯母より海の幸　葉子
秋の暮無理難題の女将かな　風舎
無住寺の今朝の箒目銀杏散る　鶴城
露草に見つめられてる心地して　京子

光が丘俳句教室（東京）

天井の人面模様夜長かな　はる
群衆の夜長ひとりの夜長かな　理恵

野菊の会（与野）

師慕句集どすんと胸を寝待月　美代子
秋草や今更人の裏表　和子
鰯雲数値はよろし医師の言ふ　清子
とろろ汁座敷童が覗いてる　光子

水明鬼石句会（鬼石）

秋の雲捨てるに惜しき包装紙　和子
甘柿を片手に持つて帰る朝　ナヲ子
送る先ひとつ減りけり栗実る　聡子

りそな俳句会（浦和）

山の端を焦がし秋雲暮れ残る　雅夫
ＯＢ連打もなんくるないさ秋の雲　久美子
写生の子空に足したり秋の雲　建治郎
梔子の実を愛でゆかむ姉小路　道を
気持ちいい寝ころび仰ぐ秋の雲　勲
秋の雲見沼より撮る新都心　暦文
秩父嶺に添ひて離れぬ秋の雲　寛治
落人の潜みし祖谷渓秋の雲　マスミ

水明熊谷句会（熊谷）

泣いて出す退学届凶作地　風子
飼ひ犬の声も切なき凶作田　道を
尾瀬ヶ原池塘をかざる草紅葉　秀子
草紅葉ここより深谷宿といふ　燈女
夕風に不作の稲の軽さかな　栄子
米不作パエリア料理講座ビラ　徹平
捷径は草の紅葉の奥の院　卓郎
句碑の丘草の色づく鬼石かな　茂子

若枝句会（浦和）

日に透けて紅葉散りゆく寺の庭　貞代
夕紅葉吾と縁側を染め暮れぬ　敏江
恙無く新米届き澄みし空　みどり
もみぢ葉の散り敷く先や大伽藍　美佐子
衣擦れぬ茶の香り聞く文化の日　泰子
炊きあがり匂ふふる里今年米　徹雄

めだか句会（浦和）

秋麗キャラメル色に染まる道　灯留
くぬぎの実もじやもじや帽子の人気者　三茅
どんぐりとはつぱではらふ山のぬし　六弦
団栗に笑顔を描く子の笑顔　敦子
奥日光野山の色を湖の上　久夫
団栗の降る夜は聞こゆ太古の音　知子

覚えなき額の傷や朝寒し　はるみ
そぞろ寒運命線を見てしまふ　月を
山荘のピアノの古色新酒酌む　鶴城

❖原稿募集

季音（雪・月・花）五句（巻末添付用紙）
水明集　五句　（〃　）
山紫集　一句　（〃　）
鼓笛集　三句
（編集部より依頼のあった方）

※二百字詰原稿用紙使用。
水明通信・随筆等自由にお送り下さい。
原稿締切　毎月二十五日必着

原稿宛先　水明俳句会　編集部
〒330―0064　さいたま市浦和区岸町
四―一〇―二一

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2024年1月号

特集 一生俳人 ～生涯追い求めたもの
○俳人たちが追い求めたもの
佐藤鬼房…渡辺誠一郎 鈴木六林男…次井義泰 金子兜太…堀之内長一 森澄雄…上野一孝 和田悟朗…久保純夫 鍵和田釉子…依田善朗 岡田日郎…鈴木久美子 岡本眸…松岡隆子 澤好摩…山田耕司
○私が追い求めるもの
池田澄子 高野ムツオ 坪内稔典 横澤放川 鳥居真里子 岩田奎

〈グラビア〉俳句界NOW 星野高士

特集 俳句で時代を記録せよ
～大正から令和まで、時代をうつすキーワードと俳句
大関靖博 大石雄鬼 成田一子 高勢祥子 若林哲哉 中山奈々 細村星一郎

投稿欄選者新春競詠

＊セレクション結社 「青麗」髙田正子

私の一冊 橋本石火「ハンザキ」

対談 佐高信の甘口でコンニチハ！ 鳩山由紀夫（政治家）

「俳句界」投稿欄 一流選者13名！ 日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社文學の森 お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

俳句 1月号予告

12月25日発売
予価1,100円(本体1,000円)⑩

豪華 新年詠7句
柿本多映 宮坂静生 星野椿 大串章 矢島渚男 高橋睦郎 宇多喜代子 大木あまり 池田澄子 中村和弘 今瀬剛一 寺井谷子 小川軽舟 小澤實 長谷川櫂 片山由美子 正木ゆう子 西村和子 高野ムツオ

新年詠12句
二ノ宮一雄 浅井民子 柴田多鶴子 鹿又英一 古賀しぐれ マブソン青眼

新春座談会 俳句の今とこれから 危機を超えて――コロナとウクライナ以後

特別企画 全国結社マップ vol.4 甲信越・東海

合評鼎談〈新メンバー〉…横澤放川・辻村麻乃・抜井諒一

新連載 現代俳句時評……岡田由季
「俳句」と「日常」――小川軽舟の俳風の意義…堀切実

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/

令和６年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応 募 句	未発表作品：15 句(表題を付す) 水明集・句会報等「水明誌」及び外部に発表した作品は不可。
締　　切	令和６年２月末日（発行所必着）
応募方法	**水明 12 月号に応募用紙添付**

選考は、新珠賞選考委員と各地区委員の選考結果を基に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員（９名）

山本鬼之介　網野月を　大村節代
石山かつ子　石井喜恵　保坂翔太
青木鶴城　日髙道を　曲淵徹雄

各地区委員（４名）

大橋廸代　檜鼻ことは　永野史代
五明　昇

新春俳句大会のご案内

［日　時］　令和６年２月１日㈭　12時　　受付
　　12時30分　投句締切
［会　場］　浦和コミュニティーセンター第 14 集会室
　　（JR 浦和駅東口前パルコ 10 階）
［投　句］　「春待つ」（「待春」「春を待つ」可）
　　「寒卵」（「寒たまご」可、「寒玉子」不可）
　　各１句
［参加費］　1,000 円
［申　込］　１月９日㈫から受付開始。25日㈭までに会費と申込書（１月号に添付）を添えて発行所総務部宛にお願いいたします。

年当初の新春俳句大会です。日時をご確認の上、奮ってご参加ください。
※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。

事業部

水明忌のご案内

［日　　時］　令和６年２月29日㈭　12時　　受付
　　12時30分　投句締切
［会　　場］　浦和コミュニティーセンター第13集会室
　　（JR 浦和駅東口前パルコ 10 階）
［参 加 費］　1,000 円

※　「水明忌」は、長谷川秋子（第２代主宰）、星野紗一（第３代主宰）、星野光二（第４代主宰）の忌を修する日です。日時をご確認の上、奮ってご参加ください。
※　当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。兼題などの詳細は１月号、２月号に発表いたします。

事業部

令和６年度　「例会・句会指導者および幹事の会」開催のお知らせ

昨年度より指導者および幹事の会を再開し、水明俳句会の運営等にご理解が深まったことを実感しております。

令和６年におきましても水明俳句会の組織としての在り様を皆様と再考し、水明俳句会の更なる発展のための施策などの討議もいたします。

万障お繰り合わせの上、ご出席ください。

記

◆日　　時　令和６年２月１日㈭　10：00（09：30受付）
約１時間半を予定

◆会　　場　浦和コミュニティーセンター10Ｆ第13集会室
（浦和駅東口前パルコ10階）

◆議案など
・令和６年度の年間事業計画について
・各例会、各句会の現状報告、および情報交換
・例会、句会の会場・時間などの変更事項の報告について
・水明集および他の応募句等の投句方法について
・その他

※欠席の場合は、総務部宛に連絡をお願いします。なお代理の出席をお立てください。

※当日は午後から「新春俳句大会」が開催されます。併せてご出席ください。

令和５年12月

水明主宰　山本鬼之介

幹事長　網野　月を

いかがですか
「俳句日めくりカレンダー」

令和六年の「俳句日めくりカレンダー」の三六五句の中に、また鬼之介の句が選ばれました。掲載される句は、七月十九日の「噴水を身軽な水は逃れけり」です。公園に設置された噴水をじっと見ていて、噴水の虜になった水の憐れさを感じての俳句です。

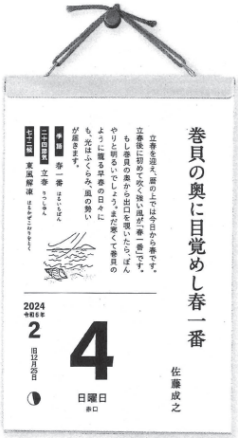
来年のカレンダーから、監修者が宇多喜代子氏から神野紗希氏に替わられてますが、選出された三六五句の一句一句に付けられた解説と暦の情報が、皆さんの作句に大いに役立つと思います。よろしければ、直接左記へご注文ください。

主宰　山本鬼之介

［注文先］
新日本カレンダー㈱　電話　０６（６９７１）４４８０㈹

俳句の日めくりカレンダー

2024 令和6年



一日一句、３６６句を掲載。
明治時代や現代の句も、幅広く掲載。

作句に役立つ「暦」の情報。
季語、旧暦、節句や行事などの情報も掲載。

すべての引用句に解説付き。
すべての引用句に、神野紗希氏の解説付き。

送料無料！一冊からでも。
まとめ買い割引もありますのでご検討下さい。

資料をご希望の方は、下記へご請求ください。

俳句の日めくりカレンダー 2024
サイズ：18.5×12cm・380ページ
「掲載句と俳人の一覧表」付き
監修：神野紗希
2,000円（税込2,200円）

※在庫数に限りがあるため、品切れになる場合がございます。

新日本カレンダー株式会社　〒537-0025 大阪市東成区中道3丁目8番11号　TEL.06-6971-4480　FAX.06-6972-5885

風　声

○**現代俳句**十月号――「『現代俳句年鑑２０２３』を読む」欄

永杉星児氏の感銘十句抄に　　星野和葉

青饅やひと言多き人ばかり

○**現代俳句**十月号―「現代俳句の風」欄

朝風や芒の解くる音幽か　　池田雅夫

看護師の探る血管そぞろ寒　　五明　昇

黄金の国ジパングを黍嵐　　染谷風子

「百薬」と宣ふ夫の温め酒　　原田秀子

父母の齢を越えて健やか暮の秋　　茂木和子

いざよひの見返り弥陀に呼ばれたり　　大橋廸代

遺伝子を紡がぬ悔よ墓洗ふ　　由良ゆら女

○**くぢら**（中尾公彦主宰）十月号――「受贈俳誌美術館」欄

憧るるひとの夏帽深みどり　　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞代表）十月号――「受贈俳誌紹介」欄

命あるごとく消えゆく二重虹　　**鬼之介**

○**雪嶺**（石本雪鬼主宰）十・十一・十二月号――「受贈誌」欄

囀を聞きわけてゐる鳥オタク　　**鬼之介**

鼻の差の勝馬ゆけり青葉道　　〃

○**太陽**（吉原文音主宰）十月号――「受贈誌御礼」欄

誰を待つやら三条小橋紹を召して　　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）十月号――「諸家近詠」欄

ためらはず蟻のぼりゆく御神木　　**鬼之介**

○**卻**（山本一歩主宰）十月号――「受贈誌の一句」欄

古書店の主居眠り夏至の雨　　清水桂子

（日髙道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和五年十月三十一日現在―

田寺玲子　10口　　鳴海順子　2口

丸山マスミ　5口　　野田静香　2口

石山かつ子　5口　　大塚茂子　1口

緒方みき子　2口　　保坂翔太　1口

小林京子　1口

岡田宣子　1口

西幅公子　1口

河野はるみ　1口

笹本啓子　1口

菅原真理　3口

横山礼子　2口

―合計50口―

水明塾より

青木鶴城　2口

日髙道を　2口

曲淵徹雄　2口

丸山マスミ　2口

正木萬蝶　2口

田中章嘉　2口

後記

水明では今年も、一月三〇日の新春俳句大会を皮切りに、二月二五日水明忌、四月四日春の吟行会、七月二九日、三〇日、三一日水明夏行、九月二九日りんどう忌、十月三十日水明塾と、各種の行事が目白押しでした。

六月二五日盛大に行われた全国大会の折の各賞を受賞された皆様のお喜びの笑顔を、今でも思い出します。本当におめでとうございました。全国大会では、沢山の句を投句して頂き、主宰選の発表で盛り上がりました。

そして、水明通巻一一〇〇号、鳥羽谷通巻二〇〇号を記念して、五月二九日、三十日、三一日の二泊三日で、若狭句碑めぐりバスツアーが挙行されました。さらに、夏季競詠を十月号に全水明人で行なう等々、こうして見ると、水明人は結構頑張っていますね。

ところで、今年最後の行事は、十月三十日に行われた、第七回「水明塾」です。今十二月号に講師を勤めた網野月を氏が、午前の部の水明集作家対象の全句講評講座を、昨年同様、詳しくお書き下さっています。水明集の方はもとより、季音の方にも参考になりますので、どうぞ、ご一読下さいませ。

午後の部の講師「堀田季何」氏は、まことにユニークなキャラクターの方でした。俳句のみならず、あらゆる分野に精通されていらっしゃいます。今月号の青木鶴城氏の記事をお読み頂くと、その辺の事を垣間見る事が出来ます。そして、一月号には巻頭に季何氏にお書き頂く事になっております。遠方の方や当日欠席なさった方、ご期待下さいませ。

インフルエンザの流行が収まらず、喉の薬も不足とか、どうぞ、お気をつけて。

（節代）

今月のはてな？

耳癈（みみし）いて
咨（やぶさ）か
踏鞴（たたら）
蟠（わだかま）り
鸛（せん）
滝垢離（たきごり）
復習（さら）う
捷径（しょうけい）

頁 14 16 19 24 25 38 43 75

水明発行所受付時間

（048−822−4741）

曜日：（月・火・水・木・金）

時間：12時半〜午後4時半

（土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和五年十二月号
通巻一一一九号
令和五年十二月一日発行

発行所　水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四−一〇−二二
電話　048−822−四七四一
ホームページ
「水明俳句会」で検索

誌代　半年分　六、〇〇〇円
一年分　一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分　二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分　三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇−〇−一九二三九三
発行人　山本鬼之介
印刷所　中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

題

季音 雪月花

二月号 十二月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名（俳号）

き・り・と・り・せ・ん

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

三月号　十二月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

きりとりせん

山紫集　三月号　十二月二十五日締切

十二月の兼題「山眠る」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音抄

山本鬼之介

連嶺の雲は動かず葛の花　矢作水尾
健やかに老い新栗のモンブラン　山中みどり
いちだんと活気づく村吊し柿　柚木治子
墨蹟は深く心に雁わたし　由良ゆら女
切株や常の茸と毒茸　網野月を
刈田中落日に佇つカメラマン　石井喜恵
「水」の字の蔵のしころや吊し柿　松宮保人
吐息さへ山昂らせ龍田姫　梅澤佐江
後手に結ぶお太鼓菊日和　井上燈女
きららネームずらりと並ぶ学園祭　渡辺舎人
男と女その際にゐて新豆腐　正木萬蝶
ゆつくりと坐るゆつくり温め酒　松井由紀子
着流しに藍の角帯菊日和　檜鼻ことは
お伽噺幾つも浮かぶ秋の川　河野はるみ
こぼれ萩脛たくましき大師像　曲淵徹雄
控へ目になほ控へ目な萩の白　日高道を
団栗を踏みて孤高の人となる　青木鶴城
山門の龍を遊ばせ松手入　野田静香

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道＜身辺トピック＞

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明＜随筆＞

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明　令和五年十二月一日発行　毎月一日発行

水明抄

山本鬼之介

変幻の無数の鰯一と化す　反町修
吹かれ来て葉に縋り付く秋の蝶　梅澤輝翠
秋簾置屋の奥に人の影　岡田宣子
文机の窓辺に果つる法師蝉　越田栄子
秋遍路斜月が肩にふりそそぐ　篠﨑紀子
秋燕見送る海人の孤舟かな　菅原卓郎
少年の頑なな恋青蜜柑　菅原真理
宵闇や連れ添ふ影もなく独り　清水桂子
それぞれの小石に夕日秋の水　池田珪子
森の音の粋な転調水の秋　皆川更穂
星月夜旅のマストに絵の人魚　森下山菜
木犀や開かずの窓を開くる朝　新暦文
雨月かな白磁の盃をいざ酌まん　小林京子
京町家生菓子にある秋の色　西幅公子
秋めくやジャワ更紗売る白い店　阿部幸代
レコードの音色懐かし雨の月　丸屋詠子
珈琲にセロの音溶くる秋の暮　元田亮一
石橋の裏側映す秋の水　霜多光代

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈜	大橋廸代	森本早苗

（第九十六巻　第十二号）　定価　一〇〇〇円